

台湾情報誌

# 交流

2013年3月 *vol.864*

公益財団法人 交流協会  
Interchange Association, Japan

2012年第4四半期の国民所得  
及び2013年の経済見通し



# 交流

2013年3月  
vol. 864

## 目次

CONTENTS

「服部禮次郎氏を偲んで」 (服部前会長お別れ会での大橋会長の弔辞) .....	1
2012年第4四半期の国民所得及び2013年の経済見通し .....	3
2012年第4四半期国際収支を発表 .....	12
台北の歴史を歩く その18 台北の歴史を歩く 天母の歴史を探る .....	15 (片倉佳史)
日台青年交流事業 .....	24
【台湾内政、日台関係をめぐる動向】 江宜樺内閣の成立と第四原発建設反対デモの実施 .....	44 (石原忠浩)
コラム:日台交流の現場から 大陸向輸出依存型経済の悲哀 .....	57
編集後記 .....	58

※本誌に掲載されている記事などの内容や意見は、外部原稿を含め、執筆者個人に属し、公益財団法人交流協会の公式意見を示すものではありません。

※本誌は、利用者の判断・責任においてご利用ください。

万が一、本誌に基づく情報で不利益等の問題が生じた場合、公益財団法人交流協会は一切の責任を負いかねますのでご了承ください。

### ● ● 交流協会について ● ●

公益財団法人交流協会は外交関係のない日本と台湾との間で、非政府間の実務関係として維持するために、1972年に設立された法人であり、邦人保護や査証発給関連業務を含め、日台間の人的、経済的、文化的な交流維持発展のために積極的に活動しています。

東京本部の他に台北と高雄に事務所を有し、財源も太宗を国が支え、職員の多くも国等からの出向者が勤めています。

服部禮次郎氏を偲んで

## 弔 辞

昭和電工株式会社 相談役  
公益財団法人 交流協会 会長  
大橋 光夫

服部禮次郎さん、貴方の遺影に向い、私は今、深い悲しみの中にあると同時に、「何ですか、元気を出して下さい」と貴方のお叱りの声が聞こえてくるような気がしております。

思えば昨年7月のことでした。交流協会の近況を報告申し上げるべく、慶応病院へお見舞いに伺いたいと、お願い申し上げました。もうちょっと待ってほしいとのご返事でしたが、その直後に服部さんご自身からお手紙を頂戴いたしました。「10月には台湾の国慶節祝賀レセプションに出られますので、その折貴方にもお会いできますよ」とご入院中にも拘らず、心を配られた、そして温かさが滲みでたお手紙でした。

服部さんはお会いする全ての人を引き付け、包み込む魅力をお持ちでした。あの温かさ、優しさにもう触れることができないと思うと、私は心の底から哀惜の念を禁じえません。

服部さんには、数多くの場面でご指導いただき、それぞれに思い出がありますが、服部さんに私がお礼を申し上げたいことを敢えて一点に絞れば、それは交流協会と経団連活動を通じての台湾関係であります。

日本と台湾の間には、日本が中国との国交を正常化した1972年以来、政府間の国交はありません。従って双方の交流を経済、文化など多くの分野で継続することを目的として、日本側は「交流協会」、台湾側は「亜東関係協会」という民間団体を設立し、唯一の実務処理機関としてその役割を40年を超えて果たしております。

「服部さんはその日本側の交流協会会長を1993年から約18年の長きに亘り務められ、多大なご功績を残されました。東京の羽田と台北の松山空港間の空路開設などはその代表的な例ですが、私が会長を引き継ぎましてからの「日台民間投資取決め」なども、実質的には服部さんのご努力によるものであります。このような服部さんの貢献は東日本大震災に際し、台湾から日本へ破格の義捐金が送られたことと決して無縁ではありません。」

服部さんが交流協会会長を務められた間、台湾の総統は国民党の李登輝氏、民進黨の陳水扁氏、現在の国民党の馬英九氏と3代に亘っておりますが、交流協会会長ご退任にあたり、2011年10月、日台間の友好関係促進への卓越した功績により、馬総統から「大綬景星勳章」を授与されました。

また、経団連においては、日台間の民間経済交流を維持拡大させるための「東亜経済人会議 日本委員会」委員長を1991年から8年間務められました。その間、今日の台湾繁栄に多大な貢献をされた経済人

である辜振甫さんと辜濂松さんが台湾側の委員長を務められました。

お二人とは家族ぐるみのお付き合いをされ、固い絆で結ばれていらっしゃいました。これは正に冒頭に申し上げました服部さんの人間としての魅力の賜であり、余人をもって代えがたいお力であったと存じます。

そのほか、服部さんの国際関係でのご活躍、ご貢献は枚挙に暇がありません。

台湾からだけではなく、オランダ、スウェーデン、ノルウェー、フランス、オーストリア、タイ、マレーシアといった多くの国々からその功績を称えられ、勲章を受けておられます。

服部さん、いつまでもお話は尽きませんが、服部さんの人を愛する、人の心を豊かにする精神性は、我々後輩の、そして更に後に続く若い人々の心の中に、いつまでも、いつまでも生きていきます。日本が多くの困難に立ち向わねばならない今日、この服部さんの精神性こそ、日本が求める世界の平和と人類の未来のために最も必要だと、私は信じます。

服部さん、どうぞ、これからも天上から我々と日本をお見守りください。

2013年3月15日

# 2012年第4四半期の国民所得及び2013年の経済見通し

## I 概要

行政院主計処は、2月22日、国民所得統計評価審査委員会を開催し、2012年第3四半期の国民所得統計について修正を行い、2012年第4四半期の国民所得統計（速報値）及び2013年の経済成長予測の審議を行い、結果を発表した。

- (1) 2012年第4四半期の前期比成長率（季節調整後）の年率換算値（saar）（速報値）は+7.30%、前年同期比成長率（yoy）は+3.72%（2013年1月時点の予測値は+3.42%）となった。また、2012年第3四半期の前期比成長率（季節調整後成長率（saar））は+3.93%、前年同期比成長率（yoy）は+0.73%（元+0.98%）に修正。
- (2) 2012年上半期（第1、2四半期 saar がそれぞれ+4.97%、+▲0.10%、yoy がそれぞれ+0.59%、▲0.12%）と併せた2012年通年の経済成長率は+1.26%となり、1月時点の予測値（+1.25%）より0.01ポイントの上方修正となった。一人当たりGDPは2万378米ドル，一人当たりGNPは2万1,035米ドルとなった。また、CPIは+1.93%の上昇となった。

- (3) 2013年の経済成長率は+3.59%となる見通しであり、1月時点の予測値（+3.53%）より0.06%ポイントの上方修正。一人当たりGDPは2万951米ドル，一人当たりGNPは2万1,588米ドル、CPIは+1.37%となる見通し。
- (4) 今回の評価審査委員会においては、今年の4月30日からGDPの速報値（1月末、4月末、7月末、10月末）を発表する際には通年の経済成長予測を修正せず、2月、5月、8月及び11月にGDP予測値を発表する際に、当委員会の審議を経て、修正することを決議した。

## II 国民所得統計及び予測

### 一. 2012年第4四半期及び通年の経済成長（速報値）

#### (一) 2012年第4四半期GDP

2012年第4四半期の前期比成長率（季節調整後（saqr）（速報値））は+1.78%、年率換算（saar）は+7.30%となった。また、前年同期比（yoy）（速報値）は+3.72%となり、1月時点の予測値（+3.42%）を0.30%ポイント



上回り、2012年11月の予測値(+2.97%)を0.75%ポイント上回った。これは主に、民間消費及び輸出の成長が予想したものより伸びたことによるものである。

## 1. 外需面、

- (1) 世界経済の緩やかな回復及び昨年基準値が低かった要因から、2012年第4四半期は、情報通信及び基本金属製品などの輸出が引き続き減少しているものの、減少幅は緩和されてきている。また、プラスチック製品が増加し、光学カメラ製品及び鋳製品がともに二桁成長となったことから、輸出(米ドルベース)は+2.47%と3季連続で続いていた下降傾向が終息した。また、サービス貿易を加え、物価要因を控除した商品サービス輸出は+3.95%、季節調整後の年率換算値(saar)では+5.32%となった。
- (2) 輸入は、原油の輸入額が+24.59%の大幅増となったものの、資本設備の輸入は予測されたほどには伸びず、第4四半期の輸入(米ドルベース)は▲0.07%となった。サービス貿易を加え、物価要因を控除した商品サービス輸入は+2.15%、季節調整後の年率換算値(saar)は▲1.73%となった。
- (3) 輸出と輸入を相殺した外需の経済成長率寄与度は+1.78%ポイントとなり、季節調整後成長率(saar)への寄与度は+4.98%ポイントとなった。

## 2、内需面

- (1) 第4四半期は、株価の上昇(株価指数が2012年11月21日の7,088ポイントから12月28日の7,699ポイントに上昇)、主要財政経済指標の好転及び物価の安定化から、居住者の消費マインドが次第に回復している。主要経済指標のうち、小売業及び飲食レストラン業の営業額はそれぞれ+1.79%、+2.61%となったほか、台湾内観光名勝地の観光客数は+19.75%となり、海外出国人数が+10.48%、民間によるファンド手数料支払いが+24.22%となったことなどが、民間消費の堅調な下支えと

なっている。自家用小型自動車の新車プレート申請は▲4.62%、上場・店頭取引高は▲10.48%となったものの、前期(それぞれ▲7.14%、▲35.57%)との比較では好転の兆しが見えつつある。こうしたことから、第4四半期の実質民間消費(速報値)は+1.55%と、2012年11月時点の予測値(+0.14%)より1.41%ポイント上回った。また季節調整後の年率換算値(saar)は+2.61%となった。

- (2) 民間投資は、半導体業者は引き続き資本支出を拡大しているものの、企業の過剰生産は続いており、第4四半期の資本設備輸入(台湾元ベース)は▲2.33%と引き続き減少し、機械設備投資は▲2.94%となった。一方、輸送用機器は、飛行機など大型輸送用機器への投資が増加したことから、実質は+25.53%となった。また、建築工事は+11.93%となった。こうしたことから、民間固定投資(+5.56%)、政府投資実質(▲11.47%)、公営事業投資(▲2.82%)、実質在庫調整(66億元減)を合計した第4四半期の資本形成(実質)は+8.97%となり、季節調整後の年率換算値(saar)では+4.71%となった。
- (3) 上記に政府消費(▲1.71%)を加えた内需全体の経済成長率(+2.45%)への寄与度は+1.94%ポイントとなった。また、季節調整後の内需の成長率(saar)は+2.84%となり、季節調整後経済成長(saar)への寄与度は+2.32%ポイントとなった。

## 3、生産面

- (1) 第4四半期の農業生産は▲6.57%、工業生産は+5.06%となった。このうち、製造業では、電子部品業が、スマートフォン及びタブレット・コンピュータへの旺盛な需要の恩恵を受け、半導体ハイテク生産工程の稼働率が高水準を維持したことから、第4四半期の製造業生産指数は+4.37%となった。また、実質(速報値)では+5.57%、経済成長率への寄与度は1.69ポイントとなった。

(2) サービス業では、小売業の営業額が、総合商品及び食品飲料など販売が好調で1.79%となった。一方、卸売業は+0.47%と4季連続のマイナス成長が終息し、プラス成長に転じ、実質成長は+1.03%、経済成長率への寄与度は+0.18%ポイントとなった。情報通信・広告業については、第4四半期の携帯電話の通話時間が▲4.08%となったものの、データ通信利用者数が+26.98%の大幅増、またコンピュータシステムの設計、資料処理及び情報提供サービス業の営業額が+5.05%となったことから、実質営業額では+1.57%、経済成長率への寄与度は+0.06%ポイントとなった。金融保険業では、金融機関の利息収入純額が+1.77%、上場(店頭)株取引額が▲10.48%となったことから、実質成長率は+1.75%、経済成長率への寄与度は+0.10%ポイントとなった。建物所有権売買移転登記件数が+11.61%となり、不動産の80%以上を占める住宅サービスが依然として安定した成長を続けたことから、不動産全体の実質成長率は+2.75%、経済成長率への寄与度は+0.23%ポイントとなった。

## (二) 2012年経済成長(速報値)

- 1、2012年第3四半期は、各種の主要経済指標に基づき修正を行い、季節調整後の対前期比成長率(saqr)は+0.97%、年率換算値(saar)は+3.93%となった。また、前年同期比(yoy)は+0.73%(2012年11月時点の予測値+0.98%より0.25%ポイント下方修正)となった。
- 2、第3、4四半期を合計した2012年下半期の経済成長率は+2.23%となり、上半期の成長率+0.23%(第1四半期+0.59%、第2四半期▲0.12%)と併せ、2012年通年の経済成長率は+1.26%となり、2013年1月時点の予測値+1.25%より0.01%ポイント上方修正、2012年11月時点の予測値(+1.13%)より0.13%ポイント上方修正となった。

## 二、2013年経済展望

### (一) 国際経済情勢

- 1、最近、米国経済のファンダメンタルズが次第に改善し、中国大陸の成長力が回復し、日本政府による金融緩和及び財政政策といった景気刺激策の実施といった状況の下、世界経済の回復が明らかとなってきている。しかしながら、米国の財政の崖問題及び欧州主権債務問題のその後の進展は、依然として、世界景気の動向を左右する重要な要因となっている。
- 2、世界的な経済予測機関である Global Insight の2月の最新の経済予測によると、2013年の世界経済の成長率見通しは+2.6%(1月時点の予測より0.1%ポイント上方修正)となる見通し。このうち、2013年の主要先進国経済は+1.0%(1月時点とほぼ同様)、新興経済国は+5.3%(0.2%ポイント上方修正)、中近東及び北アフリカ地区は+2.6%(0.2%ポイント上方修正)となる見通し。
- 3、2012年第4四半期の米国経済は政府支出の減少によりマイナスとなり、今後も財政支出の減少が検討されており、経済の安定成長には不確定要素が未だに存在している。しかし、不動産市場の好転、消費及び企業投資の回復、ファンダメンタルズの改善が続くことにより、2013年は+1.9%(0.2%ポイント上昇)となる見通し。
- 4、欧州は、中央銀行が金融市場の安定に尽力しており、債務危機のマイナス効果が第1にコントロールされてきているものの、債務国は引き続き財政節約措置を実施しているほか、失業率が高止まりしており、経済は依然として弱含みとなっていることから、2013年のEU諸国の経済はゼロ成長(0.1%ポイント下方修正)となる見込み。このうち、主要経済国は、イギリス及びドイツがそれぞれ+1.0%、+0.8%となるほか、フランス、イタリア及びスペインはそれぞれ▲0.2%、▲1.4%、▲1.6%となる見通し。
- 5、中国大陸は、輸出及び工業生産の好転、都市化、鉄道・高速道路などのインフラ建設計

画の推進が内需の押し上げにプラスとなることから、2013年の経済成長は+8.2%（0.2%ポイントの上方修正）となる見通し。また、日本は、デフレの泥沼から脱却するために金融緩和政策を実施し、円レートが大幅に下落しているほか、拡張的な財政政策を推進しており、輸出及び内需の振興が期待されることから、今年の経済成長率は+0.4%（0.4%ポイントの上方修正）となる見込み。このほか、香港の経済成長率は+3.7%（横ばい）、シンガポールは+2.3%（0.4%ポイント下方修正）、韓国は+2.1%（横ばい）となる見通しである。

(二) 2013年の経済成長率+3.59%（予測）

2013年の経済成長率は+3.59%となる見通しであり、1月時点の予測値（+3.53%）より0.06%ポイント上方修正。これは主に、世界経済の成長安定に伴う輸出の好転、株式市場取引の活発化、消費マインドの明らかな改善を踏まえて、輸出及び民間消費の成長予測を上方修正したことや、輸出の増加に伴う需要及び内需の増加に伴う輸入の増加を踏まえて、輸入（GDPのマイナス項目）の成長率を上方修正したことなどが相互に影響しあったことによるもの。

1、対外貿易

(1) 世界景気の継続的な安定を踏まえ、Global Insightの最新経済予測は1月時点

より0.1%ポイント上方修正した。このうち台湾と貿易関係が密接な米国、中国、日本及びアセアン六ヶ国など地域はいずれも改善しており、こうしたことが台湾の輸出の原動力維持にプラスとなるものと見込まれる。

(2) このほか、スマートフォン、タブレット・コンピュータ等のモバイル通信製品の新品が続々と発売されるなか、半導体業者がこうしたビジネスチャンスに対応するため、大挙して投資を行なったハイテクウェア生産設備が次々と稼動し始めるものと見込まれる。また、大型スマートテレビ、タッチパネルなどの新応用製品がパネル及び関連部品といったサプライチェーンへの需要をもたらすほか、台湾企業のUターン投資を誘致する当局の政策が生産力の拡大にプラスとなり、ひいては輸出の成長を押し上げるものと見込まれる。

(3) こうしたことから、2013年の米ドルベースの輸出額（税関ベース）は3,199億米ドル、前年同期比+6.23%となる見通し。輸入は、輸出及び内需の増加に伴う輸入増から、2013年通年では2,900億米ドル、同+7.12%となる見通し。商品及びサービス貿易を合計し、物価要因を控除した2013年の輸出及び輸入はそれぞれ+6.35%、+5.34%となる見通し。また、輸出入を相殺した外需の経済成長への寄与度は1.78%ポイントとなる見通し。

	商品貿易年増率 (通関ベース、%)		貿易黒字 (億米ドル)	商品・サービス貿易の実質 成長率(台湾元ベース%)		商品・サービス貿易収支 (億米ドル)
	輸出	輸入		輸出	輸入	
2008年	3.63	9.67	152	0.87	▲3.71	197
2009年	▲20.32	▲27.48	293	▲8.68	▲13.10	326
2010年	34.82	44.08	234	25.56	28.23	304
2011年	12.26	12.02	268	4.53	▲0.68	320
2012年(p)	▲2.32	▲3.81	304	0.13	▲1.87	354
上半期	▲4.74	▲5.84	112	▲2.94	▲5.64	142
下半期(p)	0.10	▲1.68	192	3.12	2.01	212
2013年(f)	6.23	7.12	299	6.35	5.34	377

	民間消費実質成長率(%)		
		食品消費	非食品消費
2008年	▲0.93	▲0.97	▲0.93
2009年	0.76	1.61	0.64
2010年	3.96	1.96	4.23
2011年	3.13	1.77	3.31
2012年(f)	1.49	2.53	1.35
上半期(p)	1.76	3.96	1.47
下半期(f)	1.22	1.14	1.23
2013年(f)	1.86	1.66	1.89

## 2、民間消費

- (1) 経済の先行きが次第に明るくなるのに従い、株式市場が回復し、一部企業が積極的に求人募集を行い、就業市場の改善が続き、民間消費マインドの回復が明確となることに加え、日進月歩の消費性電子産品発売が消費力の刺激にプラスとなり、民間消費をもたらすものと見込まれる。
- (2) こうしたことから、2013年の民間消費は+1.86%、うち食品分野が+1.66%、非食品分野が+1.89%となる見通し。

## 3、固定投資

- (1) 民間投資については、受注に好転の兆しがあらわれ、技術優位を備えた半導体業者はハイテク生産設備能力の拡充を加速させるほか、通信業者がグランドサービス、無線データ通信及びデジタルチャンネル業務

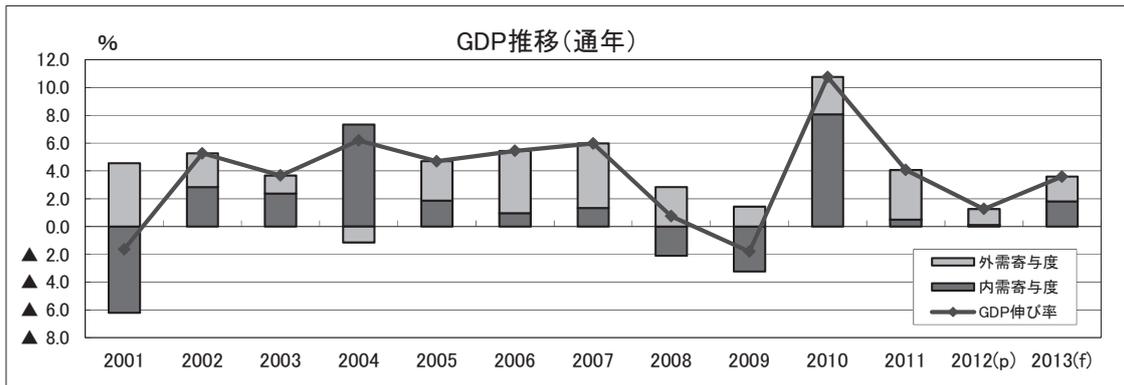
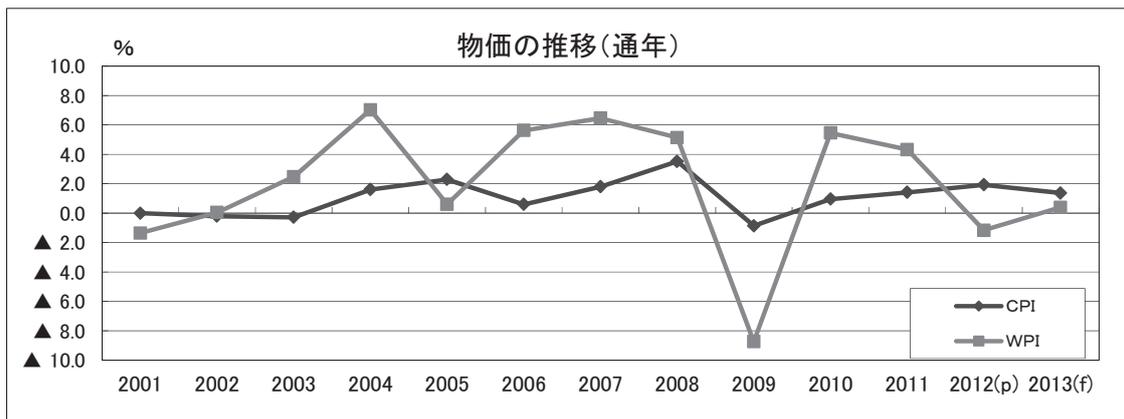
への資本支出を上乗せすることが見込まれる。また、当局が推進する台湾企業Uターン投資推進策が投資を呼び込み、域内投資の拡大にプラスとなることから、2013年の民間投資(実質)は、+7.37%となる見込み。

- (2) また、公共投資については、当局の固定投資は、2013年予算使用可能額が3,854億元に縮減されたため、公営事業投資を加え、物価要因を控除した実質固定投資は+4.81%となる見通し。

## 4、物価

- (1) 世界景気の安定は石油需要をもたらし、原油の需給は依然として比較的逼迫しており、国際石油価格は引き続き高水準にとどまっている。こうしたことから、2013年のOPECのバスケット原油価格は1バレル=106.0米ドル(1月時点の予測値(103.4ドル)より2.6米ドル上昇)と設定。また、国際石油価格及び原材料価格が高水準を維持してことから、2013年の卸売物価(WPI)は+0.40%となる見通し。
- (2) 消費者物価指数(CPI)について、石油価格の上昇が一部商品及びサービス価格上昇の圧力をもたらすほか、消費マインドの好転は、業者に値上げ余地をもたらすものと見られる。一方、食物類は、昨年の比較基準値が高かったため上昇幅は緩やかなものとなるものと見込まれるほか、家賃価格の安定、耐久財価格及び通信費の下落傾向な

	固定投資名目金額(億元)				固定投資実質成長率(%)			
		民間	政府	公営事業		民間	政府	公営事業
2008年	26,659	20,101	4,460	2,098	▲12.36	▲15.58	1.18	▲1.98
2009年	23,536	16,393	4,918	2,225	▲11.25	▲18.15	15.94	2.14
2010年	28,882	21,596	4,873	2,413	21.12	29.76	▲3.10	8.11
2011年	28,435	21,642	4,687	2,105	▲3.10	▲1.26	▲5.93	▲14.39
2012年(p)	27,403	21,352	4,125	1,926	▲4.39	▲2.25	▲12.77	▲9.03
上半期	13,071	10,556	1,760	755	▲8.91	▲7.43	▲15.74	▲13.12
下半期(p)	14,332	10,796	2,364	1,172	0.13	3.39	▲10.43	▲6.21
2013年(f)	28,806	23,015	3,854	1,937	4.81	7.37	▲7.18	0.42



どの要素が引き続き存在していることから、2013年は+1.37%（1月時点より0.06%ポイントの上方修正）となる見通し。

長率は+3.59%、1月時点の予測+3.53%より0.06%ポイントの上方修正。また、一人当たりGDP及びGNPはそれぞれ2万951米ドル、2万1,588米ドルとなる見込み。CPIは+1.37%となる見通し。

5、以上の要素を総合すると、2013年の経済成

## 重要経済指標

	実質 GDP (百万台湾元)	経済成長率 (GDP) (%)			一人当たり GDP		一人当たり GNP		消費者物 価上昇率 (%)	卸売物価 上昇率 (%)
		前期比	前期比 (年率換算)	前年 同期比	台幣元	米ドル	台幣元	米ドル		
1998年	8,679,815	-	-	3.47	421,519	12,598	424,659	12,692	1.69	0.59
1999年	9,198,098	-	-	5.97	438,384	13,585	442,497	13,712	0.17	▲ 4.54
2000年	9,731,208	-	-	5.80	459,212	14,704	465,502	14,906	1.25	1.82
2001年	9,570,584	-	-	▲ 1.65	444,489	13,147	453,084	13,401	0.00	▲ 1.35
2002年	10,074,337	-	-	5.26	463,498	13,404	474,294	13,716	▲ 0.20	0.05
2003年	10,443,993	-	-	3.67	474,069	13,773	488,645	14,197	▲ 0.28	2.48
2004年	11,090,474	-	-	6.19	501,849	15,012	518,280	15,503	1.61	7.03
2005年	11,612,093	-	-	4.70	516,516	16,051	529,313	16,449	2.30	0.61
2006年	12,243,471	-	-	5.44	536,442	16,491	550,099	16,911	0.60	5.63
2007年	12,975,985	-	-	5.98	563,349	17,154	577,869	17,596	1.80	6.47
2008年	13,070,681	-	-	0.73	548,757	17,399	562,439	17,833	3.52	5.14
第1季	3,187,360	1.36	5.55	7.55	138,275	4,381	145,306	4,604	3.58	8.68
第2季	3,306,002	▲ 0.02	▲ 0.06	5.66	138,026	4,530	140,199	4,601	4.19	8.03
第3季	3,325,198	▲ 3.58	▲ 13.57	▲ 1.23	135,415	4,337	137,717	4,411	4.53	8.95
第4季	3,252,121	▲ 5.07	▲ 18.78	▲ 7.53	137,041	4,151	139,217	4,217	1.86	▲ 4.64
2009年	12,834,049	-	-	▲ 1.81	540,813	16,359	558,751	16,901	▲ 0.86	▲ 8.73
第1季	2,928,593	▲ 1.21	▲ 4.76	▲ 8.12	130,049	3,823	135,797	3,992	▲ 0.01	▲ 9.83
第2季	3,088,340	3.56	15.02	▲ 6.58	129,458	3,903	133,398	4,022	▲ 0.86	▲ 12.80
第3季	3,278,312	2.59	10.76	▲ 1.41	136,320	4,152	139,276	4,242	▲ 1.35	▲ 11.52
第4季	3,538,804	4.94	21.28	8.82	144,986	4,481	150,280	4,645	▲ 1.26	0.01
2010年	14,215,069	-	-	10.76	585,633	18,503	604,199	19,090	0.96	5.46
第1季	3,312,610	1.94	7.99	13.11	142,672	4,462	149,607	4,679	1.28	6.58
第2季	3,486,318	2.68	11.16	12.89	143,693	4,499	148,308	4,643	1.10	8.49
第3季	3,657,592	0.82	3.34	11.57	149,808	4,683	153,319	4,794	0.38	4.13
第4季	3,758,549	0.81	3.26	6.21	149,460	4,859	152,965	4,974	1.11	2.81
2011年	14,792,928	-	-	4.07	589,576	20,006	606,321	20,574	1.42	4.32
第1季	3,556,821	2.49	10.33	7.37	147,255	4,989	154,132	5,222	1.28	3.90
第2季	3,645,265	0.30	1.21	4.56	142,558	4,932	146,668	5,074	1.64	3.99
第3季	3,786,634	▲ 0.13	▲ 0.53	3.53	149,793	5,129	152,586	5,225	1.35	4.40
第4季	3,804,208	▲ 1.17	▲ 4.58	1.21	149,970	4,956	152,935	5,053	1.44	4.98
2012年(p)	14,978,940	-	-	1.26	603,367	20,378	622,814	21,035	1.93	▲ 1.16
第1季	3,577,875	1.22	4.97	0.59	147,959	4,978	154,145	5,187	1.29	1.96
第2季	3,641,024	▲ 0.02	▲ 0.10	▲ 0.12	144,628	4,876	149,493	5,040	1.65	▲ 1.08
第3季(r)	3,814,411	0.97	3.93	0.73	153,106	5,126	156,796	5,249	2.95	▲ 1.60
第4季(p)	3,945,630	1.78	7.30	3.72	157,674	5,398	162,380	5,559	1.83	▲ 3.86
2013年(f)	15,516,027	-	-	3.59	620,013	20,951	638,829	21,588	1.37	0.40
第1季(f)	3,694,502	0.45	1.80	3.26	152,927	5,187	159,619	5,414	1.99	▲ 2.05
第2季(f)	3,783,820	0.74	3.00	3.92	148,454	5,010	153,146	5,169	1.40	0.02
第3季(f)	3,960,288	0.82	3.33	3.82	157,596	5,319	161,095	5,437	0.49	0.60
第4季(f)	4,077,417	1.28	5.24	3.34	161,036	5,435	164,969	5,568	1.62	3.15

(注) r : 修正値、p : 速報値、f : 予測値

内需・外需寄与度 (対前年同期比)

(単位：%)

	GDP		国内需要				民間消費				政府消費				固定資本形成				民間投資				公営事業投資				政府投資				国外需要						
	成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		
2001	▲1.65	▲5.75	▲6.21	0.98	0.62	1.86	0.27	▲17.91	▲5.18	▲22.98	▲4.59	▲0.06	0.00	▲9.22	▲0.59	▲8.60	▲4.73	▲9.29																			
2002	5.26	2.75	2.84	3.26	2.12	1.55	0.24	1.12	0.27	7.12	1.11	▲2.58	▲0.07	▲13.18	▲0.77	11.37	5.81	3.39																			
2003	3.67	2.34	2.37	2.91	1.85	▲1.23	▲0.18	▲0.11	▲0.02	1.93	0.31	▲4.70	▲0.11	▲4.47	▲0.22	10.23	5.53	4.23																			
2004	6.19	7.36	7.34	5.17	3.27	0.57	0.08	13.96	3.12	25.62	4.01	▲20.60	▲0.46	▲9.59	▲0.43	15.40	8.86	10.01																			
2005	4.70	1.83	1.85	2.90	1.81	0.19	0.03	2.66	0.64	1.53	0.28	14.77	0.25	2.82	0.11	7.78	4.86	2.00																			
2006	5.44	0.97	0.95	1.49	0.92	▲0.71	▲0.09	0.07	0.02	3.31	0.59	▲8.61	▲0.16	▲11.21	▲0.42	11.41	7.34	2.85																			
2007	5.98	1.42	1.34	2.08	1.23	2.09	0.25	0.55	0.12	1.36	0.24	1.57	0.02	▲4.46	▲0.14	9.55	6.49	1.85																			
2008	0.73	▲2.35	▲2.11	▲0.93	▲0.53	0.83	0.10	▲12.36	▲2.61	▲15.58	▲2.62	▲1.98	▲0.03	1.18	0.03	0.87	0.61	▲2.23																			
2009	▲1.81	▲3.71	▲3.24	0.76	0.43	4.01	0.46	▲11.25	▲2.07	▲18.15	▲2.56	2.14	0.03	15.94	0.45	1.42	▲6.11	▲7.53																			
2010	10.72	9.78	8.35	3.67	2.11	0.58	0.07	23.99	3.99	33.84	3.97	8.00	0.12	▲3.10	▲0.10	2.37	16.73	14.36																			
2011	4.07	0.58	0.49	3.13	1.69	2.25	0.25	▲3.10	▲0.56	▲1.26	▲0.17	▲14.39	▲0.22	▲5.93	▲0.17	3.58	4.45	▲0.28																			
I	7.37	4.24	3.66	4.56	2.61	1.63	0.17	8.17	1.39	11.15	1.54	▲14.02	▲0.14	▲0.65	▲0.01	3.71	11.36	4.48																			
II	4.56	1.90	1.60	3.23	1.73	0.76	0.08	2.92	0.53	7.10	0.95	▲15.83	▲0.25	▲5.57	▲0.17	2.96	5.10	0.92																			
III	3.53	▲0.19	▲0.16	3.42	1.83	2.23	0.25	▲8.27	▲1.57	▲8.76	▲1.31	▲3.12	▲0.04	▲7.88	▲0.23	3.69	2.15	▲2.10																			
IV	1.21	▲3.27	▲2.71	1.36	0.71	4.04	0.47	▲12.38	▲2.31	▲12.49	▲1.62	▲19.56	▲0.43	▲7.54	▲0.27	3.93	0.16	▲3.81																			
2012(p)	1.26	0.14	0.11	1.49	0.80	0.39	0.04	▲4.39	▲0.74	▲2.25	▲0.29	▲9.03	▲0.11	▲12.77	▲0.34	1.14	0.13	▲1.05																			
I	0.59	▲1.33	▲1.12	1.92	1.07	2.10	0.21	▲10.21	▲1.75	▲9.10	▲1.30	▲13.19	▲0.10	▲16.89	▲0.34	1.71	▲3.37	▲4.23																			
II	▲0.12	▲0.69	▲0.57	1.61	0.85	2.50	0.26	▲7.69	▲1.36	▲5.71	▲0.78	▲13.07	▲0.17	▲14.92	▲0.41	0.45	▲2.54	▲2.40																			
III (r)	0.73	0.11	0.09	0.90	0.48	▲0.70	▲0.08	▲0.95	▲0.16	1.54	0.20	▲11.51	▲0.13	▲9.12	▲0.23	0.64	2.28	1.02																			
IV (p)	3.72	2.45	1.94	1.55	0.81	▲1.71	▲0.21	1.25	0.20	5.56	0.62	▲2.82	▲0.05	▲11.47	▲0.37	1.78	3.95	1.14																			
2013 (f)	3.59	2.24	1.81	1.86	1.00	▲0.01	0.00	4.81	0.77	7.37	0.93	0.42	0.00	▲7.18	▲0.16	1.78	6.35	2.90																			
I (f)	3.26	2.11	1.73	1.57	0.89	▲0.28	▲0.03	4.85	0.74	7.01	0.91	▲7.47	▲0.05	▲6.84	▲0.11	1.53	6.20	2.93																			
II (f)	3.92	1.75	1.43	1.62	0.87	▲0.14	▲0.01	4.71	0.77	7.30	0.94	5.24	0.06	▲9.59	▲0.23	2.49	6.88	2.64																			
III (f)	3.82	2.70	2.19	2.47	1.32	0.71	0.08	4.12	0.68	6.36	0.84	1.47	0.01	▲7.62	▲0.18	1.64	5.97	2.79																			
IV (f)	3.34	2.39	1.87	1.78	0.91	▲0.36	▲0.04	5.56	0.88	8.97	1.02	▲0.20	0.00	▲5.11	▲0.14	1.47	6.35	3.24																			

(出所) 行政府主計処, 2012年11月23日発表  
(注) ▲はマイナス。外需のマイナス(▲)の寄与度はプラスの寄与度となる。

内需・外需寄与度 (対前期比、年率換算)

(単位：%)

	GDP		国内需要				民間消費				政府消費				固定資本形成				国外需要																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度		成長率		寄与度																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度	成長率	寄与度																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
2009																									I	▲ 4.76	▲ 19.44	▲ 18.33	0.80	6.28	0.81	▲ 74.45	▲ 19.94	13.57	▲ 27.60	▲ 19.38	▲ 50.29	▲ 32.95												II	15.02	19.91	16.67	2.69	▲ 0.03	▲ 0.00	169.55	15.00	▲ 1.65	49.93	26.71	75.59	28.36												III	10.76	6.29	5.49	2.99	4.15	0.52	21.09	3.19	5.27	52.46	29.35	55.75	24.08												IV	21.28	23.67	19.99	13.05	4.30	0.56	88.32	11.80	1.29	27.45	18.51	33.19	17.22												2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82											
I	▲ 4.76	▲ 19.44	▲ 18.33	0.80	6.28	0.81	▲ 74.45	▲ 19.94	13.57	▲ 27.60	▲ 19.38	▲ 50.29	▲ 32.95												II	15.02	19.91	16.67	2.69	▲ 0.03	▲ 0.00	169.55	15.00	▲ 1.65	49.93	26.71	75.59	28.36												III	10.76	6.29	5.49	2.99	4.15	0.52	21.09	3.19	5.27	52.46	29.35	55.75	24.08												IV	21.28	23.67	19.99	13.05	4.30	0.56	88.32	11.80	1.29	27.45	18.51	33.19	17.22												2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																				
II	15.02	19.91	16.67	2.69	▲ 0.03	▲ 0.00	169.55	15.00	▲ 1.65	49.93	26.71	75.59	28.36												III	10.76	6.29	5.49	2.99	4.15	0.52	21.09	3.19	5.27	52.46	29.35	55.75	24.08												IV	21.28	23.67	19.99	13.05	4.30	0.56	88.32	11.80	1.29	27.45	18.51	33.19	17.22												2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																													
III	10.76	6.29	5.49	2.99	4.15	0.52	21.09	3.19	5.27	52.46	29.35	55.75	24.08												IV	21.28	23.67	19.99	13.05	4.30	0.56	88.32	11.80	1.29	27.45	18.51	33.19	17.22												2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																						
IV	21.28	23.67	19.99	13.05	4.30	0.56	88.32	11.80	1.29	27.45	18.51	33.19	17.22												2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																															
2010																									I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																								
I	7.99	6.41	5.51	▲ 3.98	▲ 2.67	▲ 0.33	52.40	8.16	2.48	30.42	19.67	33.93	17.19												II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																	
II	11.16	4.79	4.17	7.43	0.20	0.02	0.31	0.06	6.99	21.23	14.98	13.88	8.00												III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																										
III	3.34	4.56	3.81	2.67	▲ 0.33	▲ 0.04	13.12	2.41	▲ 0.47	1.81	1.36	3.12	1.83												IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																			
IV	3.26	3.90	3.27	6.48	▲ 2.71	▲ 0.31	0.70	0.14	▲ 0.01	7.83	5.72	10.05	5.73												2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																												
2011																									I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																					
I	10.33	1.90	1.65	1.55	8.75	0.96	▲ 0.87	▲ 0.17	8.68	13.96	10.35	2.74	1.67												II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																														
II	1.21	▲ 2.34	▲ 1.97	2.35	▲ 1.64	▲ 0.18	▲ 15.10	▲ 3.03	3.18	▲ 3.47	▲ 2.68	▲ 9.60	▲ 5.86												III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
III	▲ 0.53	▲ 4.09	▲ 3.37	2.62	5.75	0.60	▲ 26.80	▲ 5.34	2.84	▲ 8.08	▲ 6.18	▲ 15.10	▲ 9.02												IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
IV	▲ 4.58	▲ 7.63	▲ 6.27	▲ 0.11	4.57	0.48	▲ 35.09	▲ 6.69	1.69	▲ 0.27	▲ 0.20	▲ 3.47	▲ 1.88												2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
2012																									I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
I	4.97	7.59	6.06	2.45	▲ 1.48	▲ 0.17	35.75	4.89	▲ 1.09	▲ 2.20	▲ 1.68	▲ 1.06	▲ 0.59												II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
II	▲ 0.10	2.00	1.64	1.45	▲ 0.68	▲ 0.08	5.74	0.92	▲ 1.74	1.58	1.17	5.40	2.91												III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
III (r)	3.93	▲ 0.55	▲ 0.45	▲ 0.03	▲ 4.77	▲ 0.54	0.63	0.10	4.38	11.67	8.31	7.27	3.92												IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
IV (p)	7.30	2.84	2.32	2.61	1.21	0.13	4.71	0.77	4.98	5.32	3.99	▲ 1.73	▲ 0.98												2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
2013																									I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
I (f)	1.80	3.80	3.01	2.20	2.20	0.23	10.28	1.61	▲ 1.21	6.45	4.72	11.36	5.93												II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
II (f)	3.00	1.22	0.98	1.97	0.66	0.07	▲ 0.83	▲ 0.14	2.02	4.56	3.41	2.52	1.39												III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
III (f)	3.33	2.57	2.06	2.65	▲ 0.74	▲ 0.08	4.51	0.73	1.27	7.58	5.62	8.03	4.35												IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
IV (f)	5.24	2.63	2.11	0.64	▲ 2.53	▲ 0.27	12.82	2.04	3.13	6.53	4.95	3.25	1.82																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			

(出所) 行政院主計処 2013年2月22日発表  
 (注) ▲はマイナス。外需のマイナス (▲) の寄与度は、GDP に対してはプラスの寄与度となる。

## 2012年第4四半期国際収支を公表

中央銀行が2月23日に発表した2012年第4四半期国際収支は、経常収支が159.6億米ドルの黒字、金融収支が116.1億米ドルの流出超、総合収支が35.8億米ドルの黒字（中央銀行準備資産の増加）となった。

### 【経常収支】

経常収支については、世界的に景気が次第に回復したことに伴い、輸出が前年同期比+2.5%、輸入が同+0.2%となった。輸出の増加額が輸入の増加額を上回ったことから、貿易収支は、前年同期比17.6億米ドル増加し、107.5億米ドルの黒字となった。

サービス収支は、無形資産（パテント）使用料支払が減少したことなどにより、前年同期比10.3億米ドル増加し、22.6億米ドルの黒字となった。所得収支は、外資に対する株式配当金の支払が減少したこと、外貨準備の運用益が増加したことなどにより、前年同期比14.8億米ドル増加し、37.5億米ドルの黒字となった。経常移転収支は、赤字幅が前年同期比2.4億米ドル拡大し、8.0億米ドルの赤字となった。

このように、貿易収支、サービス収支及び所得収支の黒字の増加などにより、経常収支は、前年同期比40.3億米ドル増加（+33.8%）し、159.6億米ドルの黒字と、四半期ベースで過去最高を記録した。

### 【金融収支】

金融収支については、直接投資が31.3億米ドル、証券投資が105.3億米ドルの流出超となった。このうち、証券投資は、居住者による対外証券投資が、保険会社による対外投資の増加により135.8億米ドルの流出超となる一方、非居住者による証券投資が、外資による台湾株市場への投資が増加し、30.5億米ドルの流入超となった。また、金融派生商品は1.0億米ドルの流入超となったほか、その他投資は、銀行部門における海外からの資金調達及び民間部門における海外預金の回収に伴い19.6億米ドルの流入超となった。

なお、2012年通年では、経常収支は495.5億米ドルの黒字、金融収支は315.0億米ドルの赤字となったことなどから、総合収支は154.8億米ドルの黒字（中央銀行準備資産の増加）となった。

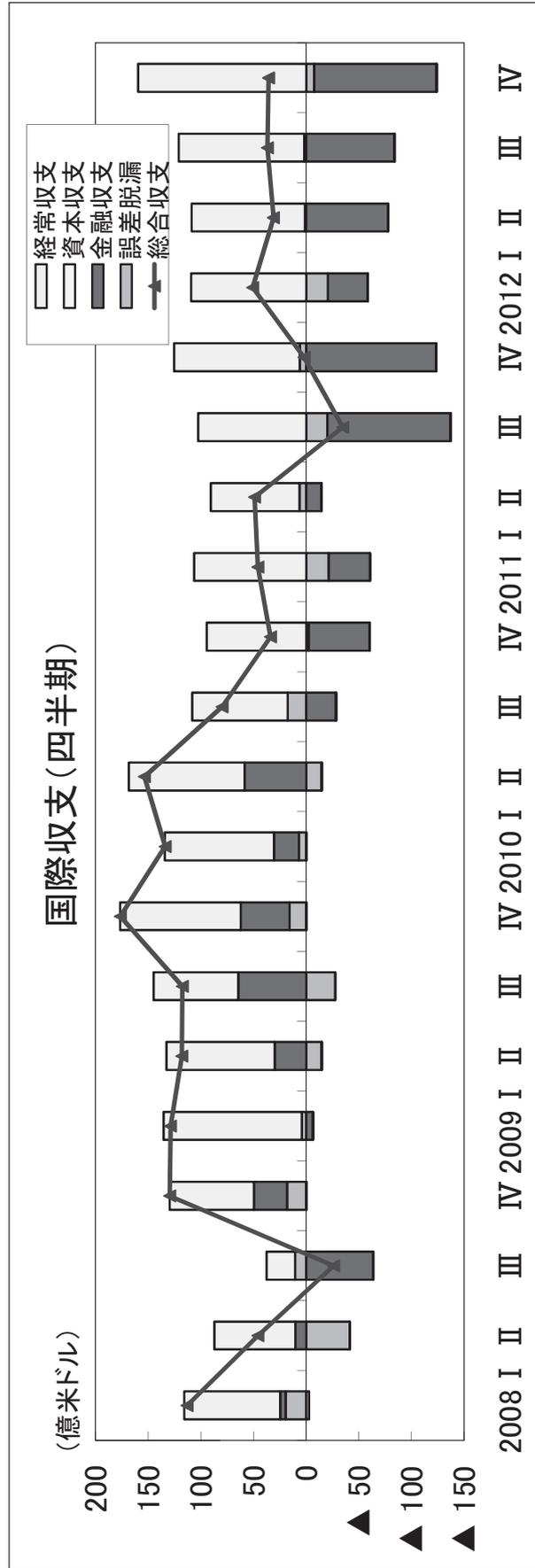
（注）台湾と日本では国際収支統計の項目が一部異なっており、台湾における「金融収支」は、日本の国際収支統計の「投資収支」に相当するもの。

国際収支の推移

(単位：億米ドル)

	2012														
	2011					2010									
	I	II	III	IV (r)		I	II	III	IV (r)						
経常収支	263.3	351.5	275.1	429.2	398.7	412.3	106.6	83.9	102.6	119.3	495.5	109.4	107.6	118.9	159.6
貿易収支	242.3	304.5	184.8	305.5	265.1	278.5	53.8	57.5	77.3	89.8	307.4	59.6	56.5	83.8	107.5
輸出	2,237.8	2,465.0	2,549.0	2,034.0	2,738.2	3,070.3	735.4	799.9	782.2	752.9	2,997.6	705.0	755.8	765.0	771.9
輸入 (▲)	▲1,995.5	▲2,160.6	▲2,364.2	▲1,728.5	▲2,473.1	▲2,791.8	▲681.6	▲742.4	▲704.8	▲663.0	▲2,690.2	▲645.4	▲699.3	681.1	▲664.4
サービス収支	▲35.4	▲16.4	18.5	19.9	24.9	38.9	12.0	5.0	9.6	12.4	61.4	7.9	19.0	11.9	22.6
所得収支	95.8	101.3	99.8	125.2	135.8	131.8	53.9	32.9	22.2	22.7	152.8	48.4	38.1	28.8	37.5
移転収支	▲39.4	▲37.8	▲28.0	▲21.5	▲27.1	▲36.9	▲13.1	▲11.6	▲6.6	▲5.7	▲26.0	▲6.5	▲6.0	▲5.5	▲8.0
資本収支 (▲)	▲1.2	▲1.0	▲3.3	▲1.0	▲1.2	▲1.2	▲0.3	▲0.2	▲0.3	▲0.3	▲1.0	▲0.2	▲0.2	▲0.4	▲0.2
金融収支 (▲)	▲196.2	▲389.5	▲16.6	134.7	▲3.6	▲320.5	▲39.0	▲41.2	▲116.9	▲123.1	▲315.0	▲37.7	▲77.6	▲83.7	▲116.1
直接投資 (▲)	0.3	▲33.4	▲48.6	▲30.7	▲90.8	▲147.2	▲48.3	▲24.7	▲39.1	▲35.1	▲98.3	▲19.8	▲19.6	▲27.6	▲31.3
証券投資 (▲)	▲189.7	▲400.6	▲122.5	▲103.3	▲206.6	▲356.9	▲129.2	▲75.9	▲146.2	▲5.6	▲424.5	▲10.6	▲135.3	▲173.3	▲105.3
デリバティブ(▲)	▲9.7	▲2.9	15.9	8.5	5.8	10.4	2.1	3.5	2.5	2.3	3.3	▲2.5	3.8	1.1	1.0
その他 (▲)	2.9	47.4	138.6	260.2	288.1	173.3	136.4	55.7	65.9	▲84.7	204.4	▲4.8	73.5	116.1	19.6
誤差脱漏 (▲)	▲5.1	▲1.3	7.6	▲21.7	7.8	▲28.2	▲21.4	6.6	▲20.0	6.2	▲24.7	▲20.6	1.3	2.2	▲7.5
中銀準備資産変動(▲)	▲60.9	40.2	▲262.7	▲541.3	▲401.7	▲62.4	▲45.9	▲49.0	34.6	▲2.1	▲154.8	▲50.9	▲31.1	▲37.0	▲35.8

(出所) 2013.02.23 中央銀行発表 r : 修正値 p : 速報値



## 台北の歴史を歩く 天母の歴史を探る

片倉 佳史

台北は人口260万を数えるアジアでも有数の大都会。その歴史をたどってみよう。今回は日本人も多く住んでいる天母地区の歴史を紹介したい。地名の由来に始まり、この地が歩んできた歴史は台湾の人々を含めても、あまり知られていない。今回はやや深く、その歴史に迫ってみたいと思う。

### 外国人居住者も多い高級住宅街

台北市の最北端に位置する天母（てんぼ）<sup>1</sup>地区は、市内きっての高級住宅地として知られている。市街地からはバスで半時間あまりの距離にあり、深い緑に包まれ、生活環境の良さで知られている。外国人も多く住んでおり、日本人居住者も少なくない。台北の日僑学校（日本人学校）やアメリカンスクールもここにある。

訪れてみると、その家並みに台湾らしさはあまり感じられない。集合住宅は多いものの、そのいずれもが高級マンションである。緑が多いことも特色であり、エリア全体が閑静なたたずまいを見せている。人々の間ではここに住むことが一種のステイタスにもなっている。

しかし、この地が歩んできた歴史となると、ほとんど知られていない。たとえば、天母という地名の由来も、事実とは異なるものが定着している。それは以下のようなものである。戦後間もない頃、この地に住み始めた米軍関係者が現地の人々に声をかけた際、英語を理解できない人々が「聽無（ていあぼー）」と答えた。これは台湾語（ローロー語）で「聞いて意味がわからない」という意味だが、この発音が「天母」に近いので、天母が地名となったというもの。現在、台湾の人々に天母の地名の由来を問うと、たいていこのエピソードが返ってくるはずだ。

また、実際に天母地区に赴き、当地の人々に天

母の歴史を尋ねてみてもしっかりとした答えが返ってくる確率は低い。これは1970年代以降に移入者が激増し、現在の天母が形成されたことにもよる。それに加え、商業エリアとしての発達があっても、小規模店舗が多く、移り変わりが激しいという現実もある。いずれにしても、天母には土地の歴史を知る「証人」が驚くほど少ないのである。

### もともとは「三角埔」を名乗っていた

「天母」という地名はもともとあったものではない。清国統治時代、この土地は台湾語で三角埔<sup>2</sup>と呼ばれていた。これは三角形をした原野という意味であり、ほとんど無人地帯であったという。農地として切りひらかれることもなく、全くの未開発地であったことが推測される。

この地が文献に登場するのは、平埔族（台湾西



台北を代表する高級住宅街となっている天母。その中心とされるのは「天母廣場」と呼ばれる中山北路と天母東・西路の交差点付近。巨大なロータリーが公共スペースとして整備されている。

部に暮らした平地原住民の総称)の一部族であるケタガラン族の集落としてである。

17世紀頃の台湾の様子を描いた『裨海紀遊(はいかいきゆう)』<sup>3</sup>という書物がある。ここに「麻少翁」という集落の存在が記されている。これが現在の天母の地にほぼ一致する。もともとは淡水河の河畔に暮らしていたケタガラン族だったが、この時代は台北盆地を中心とした広い地域に居住するようになっていた。麻少翁社(社は原住民族の集落を意味する)も、彼らの集落であった。

『裨海紀遊』の著者である郁永河は清国の官吏であり、1697年2月に台湾南部の鹿耳門に上陸したと伝えられている。その後、台南付近で随行する人員を募集し、北を目指して進んだ。本文にはその途中で目にした平埔族の人々の様子や台湾西部の地形、文化が克明に描かれている。一行は上陸から約2ヶ月あまりで台北盆地にたどり着いたと言われている。

郁永河の目的は台湾北部の硫黄の調査と採掘であった。1696年、福建省福州で大規模な火薬庫の火災があり、硫黄の需要が高まったが、福建地方には硫黄を採掘できる場所がなかった。そのため、郁永河が台湾に派遣され、調査にあたった。そして、約半年にわたって北投一帯で硫黄の採掘を行ない、10月20日に福州に戻っている。

なお、『裨海紀遊』には台北一帯に大きな湖があったと記されている。その名は「康熙台北湖」。1694年4月24日に起きた康熙大地震によってできた湖で、この地震は余震が1ヶ月も続いたという。その際、広範囲にわたって液状化現象が起こったというが、この康熙台北湖の存在自体は真偽を問われており、詳細は明らかではない。

先に挙げた麻少翁という集落も本来はより低海拔の場所にあったが、地震によって退転を余儀なくされ、現在の天母地域に移住したと伝えられている。しかし、現在、痕跡らしきものは一切残っていない。

## 長らく歴史の空白期を迎える

その後は空白の時代が訪れる。清国が台湾を統治していた時、北投は硫黄の存在によってある程度は知られていたが、三角埔一帯は居住者も少なく、行政に顧みられることはなかった。日本の統治下に入った後もこの一帯についての詳細な記載は見られない。

ただし、付近を流れる磺溪(こうけい)の存在は知られていた。磺溪とは固有名詞であると同時に、「硫黄が流れ出た溪流」という意味がある。現在も天母の住宅街の西側を白濁した河川が流れているが、これが磺溪であり、上流部で湧出した温泉水と地下水が河水となっている。もともとこの一帯に温泉が存在することは知られていたが、人里離れた場所にあり、しかも、毒蛇がたくさん棲息していたこともあって、開発の手は入らなかった。長らく知られざる出湯となっていたのである。

磺溪の上流には硫黄採掘場があった。「龍鳳谷」と呼ばれている谷間がその跡地であるとされている。現在は陽明山国家公園(国立公園)の管理するエリア内にあり、案内板などの整備がなされている。遺構らしきものは残っていないが、草木が生えず、露出した岩肌が非常に荒涼とした印象を与えている。随所に立ちこめる噴煙の存在も印象的だ。



龍鳳谷の様子。谷間そのものが温泉の湧出地であり、硫黄の採掘場であった。北投と草山(現陽明山)の中程に位置する。

## 台北に最も近い出湯、紗帽谷温泉

やや余談になるが、市民に親しまれている小さな温泉街についても紹介しておきたい。それは紗帽谷温泉と呼ばれており、日本統治時代は天母温泉と呼ばれていた。しかし、長らく浴場施設などはなく、知られることはなかった。現在も10軒あまりの浴場が集まるばかりである。

興味深いのは、どの浴場もレストランを併設していることである。つまり、食事と温泉浴をセットで楽しむのだ。味わえるの台湾料理で、中でも地鶏の美味しさで知られている。料理を味わった



紗帽谷温泉の特色はレストランと浴場施設が組み合わさっていること。「温泉餐廳」と名付けられたこのスタイルは台湾でも多くはない。



紗帽谷温泉は湯量が豊富。台北市内からは路線バスでアクセスできるといふ気軽さもあって高い人気を誇る。

後、温泉浴を楽しむ人が多いが、もちろん、先に入浴してから食事をして構わない。

この温泉は北投や陽明山といった温泉に近いが、泉質はどちらにも属さない独自のもの。無色無臭の酸性硫黄泉で、多種多様な鉱物を含んでいるために飲用には適さない。湯は常に微量の白色沈殿物を含んでいる。貧血病や皮膚病、その他婦人病や関節炎などに治癒効果があるという。

## 天母教—新興宗教によって拓かれた町

三角埔が本格的な開発を受けるのは昭和時代に入ってからである。そこには天母教（てんぼきょう）と呼ばれた宗教団体が大きく関わっている。これは日本統治下の台湾に生まれた神道系の新興宗教で、開祖は中治稔郎（なかじとしろう）という人物。教団は1925（大正14）年に設立されている。

天母教の教義は非常に独特なものである。日本古来の神道と中国大陸南方の媽祖信仰<sup>4</sup>を結びつけたもので、端的に言えば、天照大神と媽祖を同一視するという斬新なものだった。教団名となった「天母」も天照大神、そして天上聖母とも呼ばれる媽祖を意味している。両者が女神であったことは偶然ではなく、教義には「母の愛情は人類で最も強い」とされ、母性愛は仁愛を体現できるがゆえに、神は女性の姿をとって現れたという表記がある。

中治は明治11年1月13日、兵庫県生まれ。明治28年8月5日に兵庫県朝来（あさご）郡和田山（現朝来市）の竹田尋常高等小学校尋常科准訓導の職に就いている。その後、1902（明治35）年頃に台湾へ渡り、同39年に台湾総督府民政部通信局に奉職。1921（大正10）年には台南郵便局庶務課長となっている（中治赳夫著『加都郷～埋蔵金は今何処に～』より）。

その後、台北に転じ、1925（大正14）年に依願退職。その後、教派神道の一派で富士講を起源と

した扶桑教に傾倒する。そして、辜顕榮邸に滞在していた宗教思想家・中西牛郎（うしお）と出会い、扶桑教の教義から新しい教義を生み出すことになる。これが天母教となった。

## 天母教の創設と媽祖分霊

台湾総督府から認可を得た中治稔郎は教団の開祖となり、天母教教祖・権大教正を名乗る。この時、中治は媽祖信仰の聖地である福建の湄洲まで自ら赴き、媽祖の神体を持ち帰っている。この辺りの背景や状況は謎が多く、経路など、詳細を掴むことは難しいが、個人の立場で中国（中華民国）に赴くことは容易ではなく、その意気込みを感じ取ることができる。

時代背景を考えると、天母教という新興宗教を打ち立てた背景には、台湾の土着信仰を取り込み、信仰の側面から総督府の統治を支えたという意味あいは疑いない。実際に台湾総督府は渡台した宗教団体を手厚く保護しているし、台湾人の教化を推進する政策を積極的に採用している。中治も熱心な媽祖信仰を前にして、これを国家神道と結びつけようとしたと推測するのは不自然ではない。

しかし、海外渡航が容易な時代ではなく、媽祖の分霊についても相当な手はずが必要だったこと、郵便局の課長職を辞してまで教団設立に賭けていることなどを考えると、中治自身が媽祖信仰に魅せられていたのではないかという推測も十分に成り立つ。

さらに、中治家は代々、篤志家として知られ、祖父太兵衛嘉貞や父精逸は地域住民からの信望が非常に厚かったという。そういった血を受け継いだ中治が台湾人をいかにして導くかを考え抜き、結果として、「日本人と台湾人が共生するためには信仰が不可欠」と考えたのも十分に考えられる。

## 温泉施設を擁した教団

天母教については史料・文献の類が極めて少な

く、その全容に近づくことは容易ではない。私自身、長らく天母教についての資料や記録に出会うことができないでいたが、北投を中心に郷土文化を探究している楊燁氏（北投虹燁工作室主宰）から貴重な資料を見せてもらった。それは1936（昭和11）年4月に発行された『臺灣自動車界』という雑誌の記事で、天母温泉の紹介がなされていた。以下、その記事から天母教、そして、天母温泉について、紹介してみたい。

もともと天母教の教団本部は台北市永楽町にあった。中治稔郎はここで台湾民衆の教化を始めたが、翌年には台北市元園町252番地に移転している。ここには神殿、拝殿、付属集会所、教主住宅が設けられていた。その後、1931（昭和6）年に台北郊外の三角埔に湧く温泉の権利を獲得。ここを本拠地とする。その用地は約9万坪におよんでいたという。

教団移転と新社殿造営にあたって、中治は神明を受けたとされている。その夢の中にお告げとして出湯の存在が語られ、それをもとにこの地が選ばれたとも伝えられる。場所は礦溪の東岸一帯が選ばれ、各種施設が設けられることになる。

温泉は各種婦人病、神経性傷害、脚気、打撲、痔、皮膚病などに卓効が見られたという。しかし、泉源はこの場所ではなく、4キロほど離れた場所にあった。高低差があったため、これを活用して導管を敷設したという。この工事は3年近い歳月を要し、濃度の高い硫黄を含むために竹筒が用いられたという。これにエタニークと呼ばれる手法を用いて内密度を高め、水の浸透を避ける。さらに防酸剤と保温塗料を用いて内部を凝固するという方法が採用された。工事費は2万100円という巨費におよんだ。

引き湯工事が始まったのは1933（昭和8）年のことだった。教団施設の造営はその翌々年に大部分が終了している。この時には浴場、神苑、仮神殿が完成しており、教団を正式に移転させている。

敷地内に温泉設備を擁する宗教団体というのは珍しく、話題となったようである。1937(昭和12)年1月には教団直営の「一の湯寮」と呼ばれる旅館・浴場の経営も始まり、中治の夫人カナヲが経営者となり、末娘の詠子がこれを受け継いだ。

一の湯寮は700坪の敷地を誇っていた。煉瓦作りと木造平屋の建物が4棟あり、建坪は121坪におよんでいたという。そして、50畳の大広間と別室があった。浴場は25坪で男女別の浴室があったという。

浴室からは遠くに台北の家並みが眺められ、夜景も楽しめたという。これは大広間からも同じ風景が眺められるよう、配慮されていたという。また、西には観音山、北には大屯山や七星山、さらに、南には台北の家並みの奥に中央山脈までもが見られたという。

## バス会社の経営、そして、壮大な都市計画

天母教は温泉浴場の経営のほか、バス会社の経営も行っていた。この会社は天母バスを名乗り、士林から天母温泉までの路線を運行していた。その時刻表を見ると、平日は1日12便。本社や車庫が教団内にあったため、始発は士林発ではなく、天母温泉発だった。日中はほぼ1時間おきに便があり、所要時間は20分となっている。

前述の『臺灣自動車界』によれば、大型バスが輸送を担い、女性車掌も乗務していたという。途中では沿線名所を案内したりもしていたというのが興味深い。天母教としては温泉のみならず、将来的には付近一帯の観光開発も手がけていくことを考えていたようで、ハイキングコースなどの整備も進めていたようである。

また、天母教は教団を中心とした高級住宅地の開発も計画している。これは教団付近に約3万坪の住宅街を整備し、ここを一大田園都市とするものだった。民間人が自ら広大な敷地を確保し、理想的な住宅街を作ろうというのは非常に斬新な発

楊燁氏(北投虹燁工作室)提供の貴重な資料。安い運賃と本数の多さが特筆される天母温泉バスの時刻表

想で、植民地統治下の台湾においては唯一と言ってもいいほどのものである。

これだけの規模のものだったので、教団本部周辺の開発は重田栄治という人物との共同事業として進められた。重田は台北市の中心部栄町(現衡陽路周辺)に菊元百貨店を創設した人物で、台北を代表する名士の一人として知られていた。

菊元百貨店については回を改めるが、台北の目抜き通りである栄町通りに面し、7階建てで、台北随一の高さを誇っていた。中治と重田の出会いについての詳細を知ることはできないが、この時代において、新興住宅街の開発、都市計画という壮大な理想を抱いていたことは特筆すべきことと言えるだろう。戦時体制という逆境の中、それでも理想郷を作ろうとした中治と重田はどのような未来像を描いていたのだろうか。結局、敗戦によって日本人は台湾を去ることになり、二人の夢は頓挫したが、奇しくもその理想は戦後、思いも寄らない形で結実することになる。



天母教は終戦と同時に中治家の帰国によって消滅した。しかし、天母は後に発展を遂げ、中治が描いていた高級住宅街の夢は結実した。現在の天母の様子。



地名となって残った「天母」。教団は敗戦によって消滅したが、台湾の地に深く刻まれることとなった。

## 「天母」がこの地の名称となる

ここで天母という地名についても触れておきたい。もともと、日本統治時代の地名は三角埔であり、天母教が組織を構えた後も、地名としては三角埔であった。

終戦を迎え、1949年に国民党政府が台湾へやってくる、外省籍官吏たちの移入が始まる。市内に比べれば戦災も少なく、高級住宅街として開発が計画されていたこのエリアはすでに住環境の良さが際立っていたようである。当時、外省人の多くは中国大陸奪還を信じており、台湾を永住の地とは思っていなかった。つまり、あくまでも一時的な居住地だったが、高級官僚がこの地を選んだことは発展の契機となった。

1951年、中華民国政府は形式的な地方選挙を実施した。この地域からも何名かの候補者が出たが、「第一回縣議員選挙」では議員を送り込むことができなかった。その後、選挙区内の三玉里、芝山里、蘭雅里は団結して選挙に臨むことを話し合った。「里」とは日本で言う町内会に似た組織である。候補者は各「里」から交互に立てられ、任期は一回きりとした。この策は功を奏し、1958年に実施された第四回縣議員選挙で劉禮榕氏が台北県議会の議員として選出されている。

この際、三玉、芝山、蘭雅が結集した際の総称

に選ばれたのが「天母」だった。つまり、日本統治時代に天母教が開発を手がけようとしていた地域の名が天母になったのである。当然、日本統治時代に三角埔と呼ばれていたエリアもそこには含まれている。天母教は敗戦によって消滅したが、地名となって台湾の地に残ることになったのである。なお、その後の地方議員選挙でもこの天母から順当に議員が輩出され、天母という地名も広く知られるようになっていった。

厳密には、日本統治時代の天母エリアは教団のあった一帯だけを示し、現在ほど広範囲ではなかった。具体的には現在の中山北路7段一帯のみを示していた。しかし、上記のような経緯を経て、現在のような広範囲が天母と呼ばれるようになった。

## 終戦後の天母

1945（昭和20）年に戦争が終結し、日本人は引き揚げることになった。中治稔郎もその例に漏れず、家族とともに台湾を離れた。これによって天母教は消滅の憂き目に遭った。理想を途中で投げ出さなければならなかった中治の胸中がいかなるものであったか、それを知ることはできない。そして、教団消滅の顛末も謎に包まれたままである。

戦後を迎え、台湾の新たな統治者となった中華民国政府は日本に由来するものを抹消しようと試

みた。天母教が所有していた資産もすべて国民党に接収された。社殿をはじめとする建物のすべて、そして、土地の所有権についても、移管を強要されている。その後、天母教が開いていた旅館施設については、士林紙業会社が管理者となり、宿舎となった。そして、温泉浴室は公共浴場となっていた。

しかし、中治が夢見ていた高級住宅街を作りあげる計画については、奇しくも実現することになった。戦後、軍事顧問団として台湾へやってきた米軍関係者が生活環境の良さに惹かれ、この地に住むようになったからである。彼らは郷里の暮らしぶりを台湾に持ち込もうとし、英語混じりの看板が目立つようになった。そして、1949年には美國学校（アメリカンスクール）も開校し、外国人居住者が増える契機となった。1983年には日本人学校もこの地に移転してきている。



米軍関係者が台湾を去った後も、天母は外国人居住区となっていた。日本人学校も1983年10月にこの地へ移転してきた。



天母教の教団本部があったのは現在の中山北路7段191巷一带だったと伝えられるが、痕跡らしきものは残っていない。

高級住宅街としての天母はこうして形成された。つまり、その源をたどっていくと、行きつくところには天母教の開祖・中治稔郎と、そこに携わった菊元百貨店のオーナー・重田栄治の夢がある。二人の理想は頓挫を強いられたが、戦後、当地人たちが全く知り得ない状況の中で、天母は発展を続け、誰もがうらやむ高級住宅街となって現在に至るのである。運命の巡り合わせというにはあまりに奇妙な結果がここに生まれた。

### 現在も祀られている天母教のご神体

天母教は天照大神と媽祖を同一視し、これを信仰の対象としていた。国家神道系の教団の中で外地・台湾の土着信仰を取り込むということは極めて異例である。それだけでも注目に値するが、開祖・中治稔郎は形式的なものではなく、福建の湄洲まで赴いて媽祖のご神体を台湾に運んできている。その神体は今、どうなっているのだろうか。

現在、天母エリアの中心とされる中山北路と天母東・西路の交差点近くに、三玉宮という廟がある。ここに天母教教団が所有していた媽祖像が保管されている。三玉宮はもともと土地公を祀る祠でその歴史は1750年頃まで遡る。その後、1947年に現在の天母西路辺りに移転した。そして、道路の拡張工事を受け、現在の場所に移ったという。1966年のことだった。

三玉宮は道教寺院によく見られるように、複数のご神体を信仰の対象としている。媽祖像は本殿の正面左手に祀られているが、ここには合計7尊の媽祖がいる。中央に安置されたものが最大で、右手に見える顔の黒い媽祖像が最も古い。この中に天母教の教団で護られてきた媽祖像がある。私はその話を数年前に聞かされていたが、決定的な証言を掴むことができないでいた。

しかし、国民党政府によって日本にゆかりのあるものが排斥を受けた時代であっても、台湾の庶民信仰に深く根ざした媽祖に手を付けることは

きないし、撤去する必然性もない。また、2013年2月に中治稔郎の遺族である伊井達・昌子夫妻を訪ねた際にも、天母教の媽祖像が現存することを教えられていた。

そして、本稿執筆の再調査の際、その媽祖像を突き止めることができた。廟と深く関わってきたという呉義順氏の計らいで、この地に生まれ育ったという彰化在住の古老に話を聞くことができ、正面の媽祖像の右手にあるものが福建湄洲から分霊してきた媽祖像だということがわかった。

天母教が管理していた媽祖像は状態も良く、決



三玉宮は庶民信仰の場として多くの信徒が訪れている。媽祖は正面左手に祀られている。

して古い感じのものではない。中治が分霊した媽祖像の台座には「湄洲天上聖母」を刻まれている。呉義順氏と廟管理人の好意で間近で媽祖像を見ることを許されたが、今も大切に扱われていることが強く伝わってきた。

天母教は消滅の運命をたどり、開祖もこの地を去ったが、教団に置かれていた媽祖像はあくまでも生き続けていることがわかる。そういったことをふまえると、改めて中治稔郎自身がどのような思いで媽祖像を持ち込み、そして、自らの宗教の中に取り込んでいこうとしたのか、その点が気に



天母教に安置されていた媽祖像は今も信仰の対象となっている。台座には媽祖信仰の総本山であり、媽祖の出身地である湄洲の名が刻まれている。



天母教で祀られていた媽祖の神体は教祖自らが福建まで赴いて分霊したものだった。教団の神殿は天母社、もしくは天母宮と呼ばれていた。



中治家について記された書籍。天母教開祖・中治稔郎について詳しく記された唯一の文献とも言っている存在である（伊井達・昌子夫妻提供）。

なっていない。

領台初期に台湾へ渡り、後に天母教を開いた中治稔郎。宗教団体としての天母教の歴史は短かつ

たが、中治が残したものは今もなお、ここ天母という土地とともにあることは疑いない。今後の調査が期待される。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けており、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動も行なっている。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『観光コースでない台湾』(高文研)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社新書)などのほか、李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)も手がけた。そのほか、台湾でも『台湾風景印-台湾・駅スタンプと風景印の旅』『台湾土地・日本表情』(玉山社)などの著作がある。最新刊は共著『日本人、台湾を拓く。』(まどか出版)。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>

<sup>1</sup> 北京語での発音は「ティエンムー」。

<sup>2</sup> 三角埔は台湾語では「さーがっぼ」と発音するが、日本統治時代は日本語読みで「さんかっほ」、もしくは「さんがっほ」と読んでいた。

<sup>3</sup> 『稗海記遊』とも記される。

<sup>4</sup> 媽祖は中国大陸南部で広範囲にわたって信仰の対象となっている宋代の実在人物。航海の女神とされ、台湾においても篤い信仰を受けている。

## 日台青年交流事業

交流協会では、日本と台湾との若者世代の交流促進のため様々な招聘・派遣事業を実施しています。平成24年11月26日から12月4日まで台湾で東アジアを対象とする地域研究（国際関係や安全保障等の人文社会科学分野）を学んでいる大学院生19名を大学での日本人学生との交流、現代日本社会や文化に対する理解を一層深めるために東京、神奈川、京都、滋賀に招聘しました。

日本では東京大学、神奈川大学、立命館大学における日台の学生による意見交換、施設見学及び訪問先での意見交換等また、文化体験では、ホームステイ、座禅、着物等の日本の伝統文化を体験し短期間の日程ながらも多くのプログラムを通じ学術や文化・習慣に触れることが出来たようです。

今回招聘した19名のうち、男性3名女性3名の訪日報告書をご紹介します。

### 異なる日本を見る

国立台湾大学 政治学研究所  
修士課程2年 徐圓媛



2012年11月26日、飛行機を降りて羽田空港に到着し、一瞬で10度も気温の下がった空気を吸い込むと、全身が充実感と期待で満たされ、体の感覚と心境の変化が、自分が日本にいることを教えてくれました。

どの機関の見学でも数多くの収穫があり、防衛省防衛研究所の報告を直接聞くことができ、わからないことに関しては直接質問することもできました。それぞれの質問について、専門分野の研究員の方が回答と補足をして下さり、一般的な自由旅行では到底味わうことのできない旅になりました。一回一回の非常に充実した授業が、本当に貴重なものを感じられました。経済産業省産業構造課でのブリーフィングで、日本の経済政策決定のプロセスと、現在直面している困難について聞くことができました。日本は失われた10年を経験しましたが、ブリーフィングをして下さった方は、

実に楽観的に日本の産業競争における優位性をご紹介します。試練にさらされてはいるものの、正しいと考えることを継続し続ける、それはプロとして学ぶということ以外にも、一種の民族の精神的悟りともいえるべきものなのでしょう。

3日目には学術交流会が激しく繰り広げられました。自分の発表以外にも、それぞれの学術交流会では台日両方の学生の演題を聞くことができました。これまであまり関心を向けていなかったテーマを数多く発見することができ、将来における自分の研究上の視野を広げることができました。自分が関心を寄せる研究テーマで、先生からのご意見を聞くことができるのは本当に貴重な機会です。比べてみると、台湾でお話を聞いていた先生のアドバイスと今回の発表会での先生のご意見は異なる部分もあり、別の切り口から考えることで、異なる学術圏で訓練を受けた者の異なる角度と観点を、身を持って感じることができ、このような刺激を受けるのも実におもしろいと思いました。

浅草では、赤く大きな雷門のところに立って、仲見世の左右にある屋台を眺めていました。提灯が掲げられ、人形焼やせんべい、お団子など、目移りするほどたくさんのものであり、どれも魅力的です。人が途絶えることなく大勢行き交う、こ

れも賑やかな東京の一面なのです。浅草からそう遠くない場所に、東京の新しいランドマーク、東京スカイツリーがそびえ立っていました。今年5月に開業した、世界一高い塔から眺める東京の美しい夜景は、自分で登って見なければ決して感じることはできません。ワクワクしながらエレベーターに乗り込み、340mの高さまで登って東京の街を見ると、碁盤上に広がる街を一瞬にして見渡すことができ、整然とした街路、東京の街全体を一望することができました。夜に瞬く街の明かりも幻想的な美しさを添えています。ここが、憧れの街、東京でした。東京タワーも碁盤の片隅に立っていて、高い東京タワーもスカイツリーに比べると小さな駒のように見えて、うっとりするような夜景でした。

妙心寺の門をくぐると、あたりの静謐な雰囲気の影響されて、瞬く間に心も落ち着いてしまいました。苦しい修行生活を送る方は、一日に3時間しか眠ることができず、このように厳しく自分を律する生活をずっと続けられるそうで、本当に感心してしまいました。木の板の音が1つ、鈴の音が3つ響いてから、坐禅を組みます。頭の中ではお坊さんのおっしゃった「空にならなければ新しいものを入れることはできない」という言葉が響いていました。わずか15分間でしたが、坐禅を通じて、にわかにかが洗われた安心感が湧き上がって来ました。今はいつも慌ただしい生活を送っており、ゆっくり物を考える時間もなく、自分は何を求めているのかもわかりません。もう少し自分と向き合う時間を持つべきなのでしょう。お坊さんも、坐禅で大切なのは場所ではない、気持ちさえあればいつでも禅の世界に入れるとおっしゃっていました。

嵐山の渡月橋は行き交う人や車でいっぱい、渡月橋に沿ってゆっくり歩いて行こうとした瞬間、亀山上皇が「くまなき月の渡るに似る」と感



じた心境を理解しました。橋の左右両側はそれぞれ異なった風景が広がり、一方は赤や黄色のグラデーションに染め上げられた山、一方では川の水がさらさらと流れ、とても一ヶ所をじっと眺めてなどいられません。嵐山がこの旅の美のクライマックスだと思っていましたが、龍安寺の庭園にある楓の木を見ると、どちらも甲乙つけがたく、悩んでしまいました。不意に、日本ではどこでも美しい楓が見られることを羨ましく思いました。赤黄入り混じった木の下で、皆思わずカメラを握りしめて、忘れられない紅葉を撮影していました。今でも、楓の葉が静かな湖面に逆さにくっきりと映った姿が、頭に焼き付いています。

世界の人たちに戦争の恐ろしさ、醜い面を知ってもらおう、これが立命館大学国際平和ミュージアムの伝えたい思いです。ミュージアムでは、日本の加害者、被害者としての角度から、過去の苦痛に満ちた歴史の記憶を展示しており、平和の意味について深く考えさせられました。ガイドの方の口ぶりからは、日本の若者の政治、国家の発展に対する無関心に対する失望が感じ取られましたが、館内では小中学生が真剣に展示を見学していました。あるいは、彼らのような幼い子どもたちが、日本の望む未来に向けてと成長していくのかもしれない。日本は現在でも国際政治の舞台で

自らの立ち位置を探していますが、今後日本がどのように発展していくかは大変気になるところです。しかし、平和の真の意味を理解することは、あらゆる国にとってプラスの方向への前進になると思います。

最初の数日間とは異なり、バスが走る道はどんどんと狭くなり、周囲の視界が広がって、田んぼや山が目飛び込んできました。あちこちでタヌキの足跡が見られました。民泊の体験では、歴史文化の香り深い、かつての近江の国—滋賀県を訪れました。日野町の太鼓、笛の合奏による歓迎式の後、私たちは初めて民泊先の家族と対面しました。お母さんとお姉さん、妹さんが温かな笑顔で私たちを出迎えてくれて、日本人の家庭で夢いっぱい生活体験が始まりました。家族の方たちと一緒にスーパーへ行って夕食の買い物をし、一緒に夕食を食べる時間になりました。わずか数時間の間に、家族の一員になってしまったような親しみを覚えました。夕食後、お父さんが毛筆で「歓迎你們来日野、见到你們很高兴」(日野へようこそ、お会いできて嬉しいです)と書いた字の飾ってある客間で、こたつに入ってお母さんから折り紙を習い、テレビを見ました。お父さんから台湾に行ったときの写真とともに、面白かった場所の思い出を聞かせてもらい、次に台湾に来るときは地元の人間として、台湾の美しい場所を案内することを約束しました。わずか一日の体験が終わり、最後に家を離れるときにはおばあさんとしっかり両手で握手をし、また日本と台湾で会うことを約束しました。たった一日一緒にいただけですが、この友情はきっと一生続きます。

京都は本当に特別な街で、高層ビルもなく、家もあまり高くないので圧迫感がなくて心地よかったです。バスから延々と続く鴨川を眺めていると、涼しさを感じられるような気がしました。今回は、テレビでしか見ることのできなかつた着物



を体験する機会があり、わくわくしていました。メンバーたちが皆着物に着替えたのを見ると、色彩は鮮やかですが、俗っぽくなく、清水の舞台と実に合っていました。日本のお寺は台湾と違い、線香の煙が少なく、静かな印象がありました。途中の清水寺の通りにあった八橋、抹茶、和菓子、陶磁器などはどれも京都の名産品で、古色蒼然たる雰囲気がありました。京都では、実体的な物だけでなく、文化的なものを感じることもできました。建物のせいでしょうか、時空を超えて古代にやってきたような感覚がありました。この街の息遣いは、別の街にはない、実に特別なものがあります。京都は夜になるとさらに美しく、京都タワーや、京都駅から列車が次々に発車していく様子、隣のにぎやかなデパートやホテルの灯りは、これ以上ないほど美しいものでした。

帰国した今も、体には日本の旅の痕跡が残っています。今回の日本での旅は、4年前よりもさらに多くのものを得ることができ、たくさんのエネルギーをもらいました。まだ日本について本当に詳しく理解したとは言えませんが、文化や政治、経済、社会といった多くの分野に触れ、たくさんのヒントを得ることができました。今後も日本を探索していくための扉を開いてくれたのです。最後に、交流協会からこのような機会を頂けたこと、



再び新たな日本に出会えたことに感謝申し上げます。数年後の私が、このことによってどのような認識を持つようになっているか、楽しみにしています。

## 2012 年度台湾大学院生訪日団（東アジア研究）成果報告書

国立台湾大学 政治研究所  
修士課程 2 年 張祐寧



じんかん  
「人間誰か道う別離難しと、百歳の光陰指一弾、只桃花の為に旧好を訂す、李白をして長安に酔わしむることなかれ。風は遠樹に吹きて南枝暖かに、浪は高樓を撼かして北斗寒し。天地有情春合に識るべし、今年今日又歡びを成す。」  
—夏目漱石『木屑集』、「無題」。

北国日本：近いように感じられて、実際は縁遠い国  
地理的にも歴史的にも、日本と台湾は密接な関係にあり、さらに近年では両国の観光や貿易の往来が日増しに緊密になっているため、日本は台湾にとってそれほど遠い国ではないように感じられます。しかし、今回の訪日団での活動で、自ら日本という国に足を踏み入れてみると、私たちの日

本に対する理解は非常に浅いことに気づきました。

これまでの日本への理解はいずれも「本の中の日本」、「ネット上の日本」、さらには「メディアの中の日本」に留まり、自ら「実際の日本」を経験する機会はなく、幼い頃に 2 回旅行で訪れたことはあるものの、単に急ぎ足で見て回ったにすぎませんでした。今回は交流協会主催による「2012 年度台湾大学院生訪日団（東アジア研究）」という行事に参加し、十数年ぶりに日本を訪れることができました。私は謙虚な心で、台湾が学ぶべき日本の優れた点を観察しました。

1 つ目は「細やかさ」です。初日の晩に、交流協会本部が銀座で歓迎会を開いて下さいましたが、ドアを入るとすでに座席が割り振られ、テーブルにはそれぞれの名札が並べてあり、「家に帰ったかのような居心地の良さ」を感じることができました。この点からも日本人の細やかさと気配りを、身をもって感じることができました。

2 つ目は「時間に正確であること」です。日本人に比べ、台湾人は当たり前のように遅刻してしまいます。日本行きの数日前には、毎回のように集合時間の 10 数分後になってようやく集合が完了していました。これは日本人にとっては非常に重大なことで、団体行動であればなおさらのことです。ここで、引率の一人であった交流協会本部の T さんが繰り返し教え諭して下さいたことに感謝いたします。T さんからは、時間を重視する日本人の習慣をしっかりと学ぶことができました。

3 つ目は、「礼儀作法」です。台湾でも日本人は非常に礼儀正しいと聞いていましたが、自ら体験したことはなかったため、最初はあまり意識してはいませんでした。経済産業省を訪問した後、ブリーフィングをして下さった課長さんがバスまで見送って下さり、発車まで手を振ってお辞儀までして私たちに挨拶して下さい、決して役人風を吹

かせることのないその様子を見て、日本人が本当に礼儀正しいことを理解しました。

### 学術交流：お互いへの理解を深める

私にとって、今回の訪日団にとって最大の意義は日本の先生や学生との学術交流で、やはりこのような国際交流の場面は極めて貴重なものです。最初の東京大学では、川島真准教授ご本人が流暢な中国語をお話しになり、東アジアや中台のテーマにも実に詳しく、しかも川島先生の教えている院生たちのほとんどが台湾に来たことがあり、交換留学生として台湾に行かれていたことには驚かされました。そのため、一緒にいてもこの上ない親近感を覚えましたし、言葉の壁によって交流のチャンスを逃してしまうこともありませんでした。また、私たちが東京大学東洋文化研究所に行った時に講義を下さった松田康博教授は、中台の学術界でも非常に有名な方で、「日本の視点から見る東アジア戦略の構築」に関するブリーフィングは気軽にユーモラス、そして流暢な中国語で語って下さり、強く印象に残っています。

その次は神奈川大学で学術交流を行いました。事前に、学長の中島三千男先生が自ら応対を下されると伺っており、最初はややびっくりして、楽しみに思っていました。その後、中島学長が台湾好きであることがわかり、台湾の各大学を訪問したときの写真を見せて頂きました。日本による台湾の植民地時代における歴史研究の論文まで送って下さり、先生がどれだけ台湾が好きかということがよくわかりました。このことからわかるとおり、台日間にはいまだ一部の歴史的、政治的問題がありますが、このような争いがありつつも、お互いの交流は少しも損なわれてはいません。双方がこの貴重な友好関係を大切にすべきだと思います。

最後は京都の立命館大学でした。会場に入ると、背景が台北 101 となった「東アジアの未来：

日本と台湾の対話」というポスターがあり、発表する学生のテーマと名前が印刷され、発表者がしっかりと尊重されていました。このことから、立命館大学が今回の学術交流を重視していることが感じられました。

### 民泊：庶民の生活を体験する貴重な機会

今回の訪日団で最も貴重だったのが、「民泊体験」だったと思います。普通であれば、観光であろうとビジネスであろうと、親戚や友人が日本にいない限りは一般の日本人の生活を体験する機会などありません。そして、私たちを招待して下さいしたのは、Yさん夫妻一家でした。Yさんは木工職人で、そのため様々な芸術品が好きで、私たちにもこれまでコレクションしてきた様々な骨董品を見せて下さいました。私たちは驚き、興奮し、まるで博物館のようなYさんの家を絶賛しました。夕食後、日本に関する様々な話題についてお話をしました。中国と日本の歴史、東アジアの政治から台日間の様々な違いなど、何でも語り合いましたが、Yさんはとても見識が高く、しっかりとした意見をお持ちの方でした。そのため、私たちはYさんに「談古論今、如獲至宝、不虛此行（古今を論じ、得たものは宝のように尊く、今回の旅に来た価値がありました）」とする祝福の言葉を残しました。Yさんほど中国文化に深く接している方であれば、きっとその意味するところを理解して頂けるはずです。ここでもY夫妻のご招待に感謝を申し上げたいと思います。

### 平和学習：民族の歴史に対する反省を見届ける

最後に、私にとってもっとも大きな収穫となったのは、立命館大学国際平和ミュージアムでした。日本の歴史と政治についてはある程度本で読んだことがありましたので、館内の展示やガイドさんの解説を聞くとことのほか感慨深いものがありました。過去に他国を侵略した歴史を持つものの、



上：民泊先の横井さんとの記念写真



上：東京大学駒場キャンパスでの学术交流

日本人がそれを反省し、慎み深く次の世代にこの歴史的悲劇を伝え、同じことを繰り返さぬよう願っていることを目にして、深く感動しました。ガイドさんに日本人の平和憲法と現在の政治に対する見方を質問すると、おじいさんは30分近くもかけて答えて下さいました。その中で、現代日本の若者の政治に対する冷淡さについて語られていましたが、日本の上の世代の方たちが国の前途を心配していると感じました。台湾の若い世代に自国の社会に関心を持ってもらうための、またとない手本であると思いました。

**一期一会：過去を細かく検討するが、今日を見ずえる**

日本の茶道家、千利休は「一期一会」と言いました。人は一生の間に他者と一度しか会うことができないのだから、共に過ごす機会を大切にしなければならぬという意味です。今回の訪日団の行事で、出会った様々な方たちに、私たちはこれきり会う機会はないかもしれません。だからこそ日本の土地や人々の気持ちをしっかりと理解したい、それが私の持ち続けていた信念でした。防衛省防衛研究所、経済産業省、あるいは清水寺から居酒屋まで、すべて同様です。

## 台湾大学院生訪日団参加レポート

国立台湾大学 法律研究所  
修士課程三年 徐雅筑



今回の訪日事業の参加者としてお選び頂いたことを光栄に思っています。充実した、豊かな日程でした。

初めて日本に行ったのは冬で、自然風景はどちらかというと単調なものでした。今回は秋に日本を訪





れたので、美しい植物を見ることができ、温帯地域と亜熱帯地域の違いを感じることができました。

私の発表は東京大学で行いましたが、評者をして頂いた新田龍希先生は私の研究テーマについてとても役に立つ提案をして下さいました。しかし、今回の学術交流では、「専門分野の違いは山を隔てるがごとし（専門分野が異なれば全く分からなくなる）」という道理を、身をもって理解しました。皆の英語のレベルは非常に高いのですが、異なる学術分野の知識は、短い時間の中でなかなか簡単に聞く人に理解してもらうことはできません。今後は、事前に文書で資料を提供して頂ければ、他のメンバーの研究テーマも理解しやすくなるのではないかと思います。もちろん、平易な言葉と文字で自分の研究の概要を説明することも、今後の学術的執筆活動において努力が必要なところではあります。また、東京大学と台湾大学は過去どちらも帝国大学の系列に属していたこともあり、両校のキャンパス風景は似ている部分があり、見学時の興味も増しました。下の画像、建物の様式とレンガの壁は台湾大学の日本統治時代に建てられた校舎とよく似ています。

東京の地下鉄は噂に聞いていたとおり複雑で、しかもどういうわけか、駅構内での移動の動線が左側通行なのか右側通行なのか一定ではないよう



でした。自由時間が遅かったので、あまり大量の人混みに会うことはありませんでしたが、駅のことをよくわからない人がラッシュ時にぶつかった時は出入りの仕方に戸惑うかもしれません。

東京で最も印象深いことといえば、滞在していた数日の間にバスから見た美しい街の風景でしょう。木の種類が違うのか、あるいは都市が発展した時間の長さが異なるのか、台北に比べて東京の街路樹は不思議なほどに壮観でした。忠孝東路の街路樹を「並木」と呼ぶならば、東京の街路樹はほとんど「ジャングル」と言ってよいでしょう。修復が終わったばかりの東京駅は、元々の姿を取り戻し、しかも時代によって変化していないモダン建築で、とても驚き、うらやましくすら感じた





出来事でした。

江戸東京博物館もとても気に入った訪問先でした。案内のシステムも非常に詳しくこの大都会の発展の歴史を紹介しており、各種の文物や建物の模型などもあって、過去の生活の姿をイメージしやすいものになっています。しかし、これだけ大型の博物館を午後の時間だけで見学しつくすのはやや大変でした。今度東京に来る機会があれば、もう一度訪れてみたいと思います。

東京に比べて、滋賀県に滞在した時間はあまり長くはありませんでしたが、この地域に住む方たちの、故郷に対するアイデンティティと自信を強く感じさせられました。琵琶湖見物のガイドをして下さったNさん、日野商人館のスタッフの方、民泊先のお父さん、お母さんの言葉からも、皆さ

んがどれだけこの土地を愛し、どれだけこの自然と文化的財産を誇りに思っているかを感じ取ることができ、日本、あるいはこの土地の家庭教育や学校教育の中で、特に郷土教育を重視しているがために、このような地元愛にあふれる県民が生まれたのではないかと思ってしまうました。

民泊をした一昼夜は非常に特別な体験となりました。食事やおやつの準備をする中で、日本人が食べることをとても大切にしていることを目にしました。一日三食は質、量ともに全くおろそかにすることなく、パン一個とコーヒー一杯で済ませることに慣れてしまった私達にとっては、衝撃的ともいえる教育になりました。今回の旅程での朝食はいずれも大変豪勢でしたが、ホテルのビュッフェによる豪華な朝食と、普通の家庭で食べる豪

勢な朝食は、全く別なものに感じられました。また、日本人の女性が結婚後に仕事から離れてしまう理由もいくらかは理解できました。これだけの家事の量は、仕事をしている女性にはとても対応できるものではありません……

中高生の時に、山村美紗の推理小説をたくさん読んでいましたので、京都にはずっと憧れていました。今回京都に三日間滞在でき、作家が描いた風景に立つことができ、とても嬉しく思いましたが、昼間の自由時間が非常に少なく、少し物足りない気もしました。

京都は新旧が調和を持って共存している都市で、主要な道路にはビルが林立し、他の都市と大差ないように感じられます。しかし、脇の小路に入ると、古くからの町家が依然として良好に残されています。他にも、数多くの寺院や古跡が近代的な街の中に存在し、道では時に着物を来た姿に出くわし、街全体が色とりどりでありながら、雑多な印象を与えません。

今回は多くの美しい風景を目にすることができ、充実した時間を過ごすこともできました。自分自身で旅をする際には到底触れることのできない体験が数多くあり、交流協会からこのような日程をご手配頂いたことに感謝しています。さらに、今回の訪問を機に、多くの面から日本という国を理解できるようになりました。

## 2012「台湾大学院生訪日団」感想レポート

国立政治大学 外交研究所  
博士課程4年 李思嫻



日本、多くの台湾人にとって、馴染み深い一方で疎遠な国でもあります。日本のポップカルチャーは台湾社会に対して、他に並ぶものがない

ほど大きな影響力を持っていますが、日本の伝統文化に対する理解は一知半解に留まっており、日本の本当の姿を探索することが私の長年の願いとなっていました。今回、交流協会による訪日事業に参加する幸運を得て、自然と頭の中の困惑が解けることを期待していました。短いフライトを経て、東京羽田空港に到着しました。飛行機がずっと乱気流に見舞われていたため、空港を出るときには頭がぼうっとしていましたが、冷たい風が吹いてきたときに、空気を目一杯吸い込み、冷たく新鮮な空気を頭に送り込みました。日本の土地を踏んだとき、私にはこれから素晴らしい出来事が始まることがわかりました。

おおまかには、今回の日程は学術交流、歴史巡礼そして文化体験の三つからなり、全体的には日本が観光客に与える強烈な比較の体験や、日本が擁する高度に発達した科学技術、夢や絵画のような自然の風景、正確な商取引、戸惑ってしまうほどの礼儀正しさなどが印象に残りました。これらの矛盾が、9日間のタイトなスケジュールの中でひとつ残らず目の前に現れてきました。

まずは、最も緊張する学術交流です。政府機関では、防衛省防衛研究所と経済産業省を訪問し、お互いに面と向かった座談会で、日本政府がアジアの重大なテーマをどう見ているのかを知りました。このような一次資料が得られることは、書籍とは比べ物にならないくらい価値のあることで、とても貴重な経験でした。また、東京大学、神奈川、立命館大学での学術発表では、英語での発表は初めてではなかったとはいえ、またひと味違った感覚がありました。民族性の違い、日本人ならではの「礼儀」とでも言うべきでしょうか。西洋の国で座談会に出席した経験をいうと、相手は遠慮なしにテーマへの見方と論文への批判を出してきて、否応なく舌戦が繰り広げられます。しかし、日本の教授は私達への愛情と思いやりからでしょうか、論文へのアドバイスという方法は比較的奥



東京大学での学術発表

ゆかしいものでした。

その次は歴史巡礼です。最も強く印象に残ったのは、国際平和ミュージアムでした。始めは、広島平和記念館と同様に、戦争が日本にもたらした大きな痛みを展示し、平和の尊さを伝えるものだと思っていましたが、意外なことに、国際平和ミュージアムで私は日本人が歴史上の出来事を取り扱う厳粛な態度を目にしました。

最初に目に飛び込んできたのは、慰安婦に関する一連の写真と戦争での虐殺の悲惨な光景でした。日本が加害者としての立場から歴史的記憶を保存し、反省をしていることを意外に思い、外国は日本人が過去の行為に向きあおうとしていないと誤解しているのではないかと思いました。特に、ガイドの方ご自身が第二次世界大戦を経験されており、成長してきた背景と時代的な意義から、日本の未来に対する憂いを語って下さいました。ガイドさんは日本の若者が歴史をしっかりと理解しようとしないうこと、日本人の優柔不断な民族性についてお話しされました。プライドの高い民族にとって、「歴史と向き合う」というのは非常に勇気のあることだと思い、日本に対する敬服の思いが燃え上がってきました。国際平和ミュージアムは、あらゆる災難や戦争は、起こる前に食い止めるべきであることを強調しており、ここでは大國



着物体験

の積極性と慎重さを目にしました。多くの点で台湾も参考にする価値のあるものがありました。

最後は、出発前にとっても楽しみにしていた文化体験です。妙心寺の退蔵院での坐禅は生涯の内でもめったにできない良い経験でしたし、着物を着て清水寺を見物するのも、大切な記念になりました。西洋人から日本人に間違えられ、記念撮影まで求められてしまいました。清水寺の紅葉にうっとりさせられ、伝統的な衣装を着て世界遺産である旧跡を体験するのはまた格別な味わいがありました。最も印象深かったのは、滋賀県日野町の農家での民泊体験でした。日本語があまりうまく喋れないので、楽しみにしつつも、辛い思いをしな



民泊先のご家族と記念撮影

いかと心配する気持ちでこの日を待っていました。幸いにして、民泊先のご家庭は、台湾から来た子供達にとっても親切にして下さり、不安で一杯だったのが、少し元気になることができました。

数日間の日程の中で、折にふれて日本文化の細やかさが現れてきました。知識の保存と維持には、さらに震撼させられましたし、日本人がこのような完璧な場所を持っていることを羨ましく感じました。各大学の美しさは言うまでもありませんが、美しいキャンパスに身を置くと、ここで勉強することがそれぞれの心のあこがれとなりました。学問の知識の中に身を浸すと、知識とは力であることを感じました。学術交流の合間に、東京と京都という2つの美しい都市の、他とは異なる特徴を感じる事ができました。東京の生活リズムはとても速く、急ぎ足で歩いて行く人々には、その体から発せられる自信と誇りを感じ、活力と希望に満ちているように思えました。古代の雰囲気豊かな京都に来ると、身も心もエネルギーを得たような、気持ちの安らぐ思いがしました。

最も大切なこととして、交流協会が私達を訪日団に参加させて下さったことに感謝しています。特に、李先生、Sさん、通訳のHさんとTさんは道中苦勞して引率、注意をして下さり、本格的な日本の食事に連れて行って下さいました。あまりにも多くの感謝と感動のすべてを「お疲れ様でした」という言葉にしたいと思います。また、民泊先のご家庭のご親切のお陰で、外国に来てふるさとに帰ったかのような温かさを感じることができ、おもてなしと励ましを下さったことに感謝いたします。最後に、今回の訪日でたくさんの友人を作ることができました。メンバーたちはそれぞれに素晴らしい能力を持ち、それぞれの無限の情熱と活力のおかげで、私達は期間中も一致団結することができました。ぎっしりと詰まった9日間の旅を終え、時間の沈殿を経て、それぞれの未来に対する考えが少しずつ熟成され、現実のものになると信じています。

## 東アジア研究訪日団旅行の感想

国立政治大学 日本研究所  
修士課程一年 頼裕強



### 一、日本の教授、学生との交流：

東京大学での交流会は、大学生や修士生よりも、博士課程の院生に多く出会いました。奇遇なことに、東大では多くの学生がこれまで、そして最近も政治大学と留学生を交換しており、中国語も通じたので、交流では三種類の言語を混ぜて使うことができました。初めて訪れた東大をぶらぶらと歩いていると、クラシカルな味わいに満ちた建物とキャンパスの雰囲気などが、同じく旧帝大である台湾大学とよく似ていました。初めて訪れた赤門の興奮の余韻は、今も残っています。今回、東大生の口から初めて聞いたのですが、東大の新入生は最初に駒場キャンパスに入学し、3年次以降に本郷で授業を受けるのだそうです。そのため、2つのキャンパスの雰囲気は大きく異なっています。しかし、大学院生の分布状況についてはお話を聞けませんでした。

東大に対しては、敬意と好奇心を持っていましたが、東大の川島真准教授と助手の方、学生たちは皆気さくな方ばかりだったので、少しホッと



ました。東大では台日関係に注目している新しい友人をたくさん作ることができ、過去に縁のあった日本人の友人との絆も深めることができ、温かな気持ちになることができました。

神奈川大学で交流したのは大学生で、博士課程の院生とはお話しする機会がありませんでした。今回は、ある日本の男子大学に戦後、国共内戦、海峡兩岸情勢の形成の過程と近況という台湾の近現代史についてお話しをしました。この学生はまだ1年生で、現在の台湾の政治について知らなかったもので、少しは台湾についての理解を深めてくれたのではないかと思います。今後、沢山の学生と台湾事情について話してくれることを願っています。

この他、日本の女子大生に、台湾の芸能人や歌手について知っているか尋ねてみましたが、残念なことに華流の存在を確認することはできませんでした。東大の大々的な規模に比べ、神奈川大学で交流イベントに参加した学生は少し数が少なかったですが、佐橋亮准教授は最も言葉に魅力があり、訪日メンバーたちの研究に対する意見を積極的に発表して下さった教授でした。東大よりも積極的な研究会への力の入れようになり、大変勉強になりましたが、プレッシャーも強く感じました。特に、米国留学をしていた博士課程の院生は、修士の私たちに対して深く切り込んだ意見を出して下さいました。質疑応答のレベルが噛み合わず、交流の成果が大きかったとはなかなか言えませんが、ショック療法による教育を受けたという感覚がありました。

立命館大学では多数の外国人学生に会いました。立命館大学での交流会は、外国人学生の最も多い場となり、英語がかなり重要なものになりました。立命館大学国際関係学科の教授お二人と院生はみなさんととても面白い方々で、私の発表したテーマは台湾で流行している日本のサブカルチャーに関するものなので、エヴァンゲリオンや



ゲーム、マンガ、そしてそれらのものが台日関係にどのような影響を与えているか、台湾の日本に対するイメージの確立などを語り合いましたが、交流時間は極めて限られており、今後のご縁を期待したいと思います。全体的に、英語が非常に重要になりましたが、雰囲気は神奈川大学のときほど厳粛ではありませんでした。プロフェッショナルかつわかりやすい素晴らしい意見を得られたことも、面白かった点でした。

## 二、日本の組織との交流：

今回は、政府機関、研究所、博物館、寺院を訪問しました。

防衛省防衛研究所は太平洋戦争時期以前、旧日本帝国陸海軍の史料を数多く収集していましたが、無数の空襲、日本が終戦の際に軍事機密を処分したこと、米軍による占領期などのために散逸してしまっており、史料はやはり完全な形では残っておらず、民間の個人の記録に頼る必要があります。歴史学部卒業の私は、それらの史料に強く惹かれ、感じる場所がありましたが、時間が差し迫っていたため、専門性を発揮することも好奇心を満たすこともできませんでした。しかし、多くの資料はデジタル化によって海を越えてネットによって調査することができますので、これは日本国外の研究者にとっても大きな福音となるでしょう。

経済産業省と科学技術振興機構(JST)という研

究機関で、日本の専門家とエリート官僚に出会うことができました。経産省は政府の重要機関であり、厳粛な雰囲気の前にしてメンバーたちは楽しみ半分の気持ちをしまいこんでしまいました。経済産業省産業構造課でのブリーフィングでは日本経済発展の現況と政策方針をお聞かせ頂き、さまざまメンバー達は活発に質問を始めました。私も質問をしたかったのですが、時間の関係で切り出すことができませんでした。経産省のブリーフィングには、忘れずに日本のコンテンツ産業に関する内容にも触れられていましたので、この点を確認できて満足しました。

江戸東京博物館には日本の開国、戦後に対する誇りが見られました。

国際平和ミュージアムには、日本を始めとする国による第二次世界大戦のあらゆる行為が生々しく展示されていました。共通点としては、平日は毎日小中学生の団体が見学に来ていました。これまでずっと、極右的な教科書や日本政府の謝罪しない態度に強く影響されてきましたが、今回、防衛研究所での説明や国際平和ミュージアムでの真実の展示などを見て、日本人は現実に行うことのできる処理をしたために、外交問題の部分は極めて小さくなっていると考えており、残っているのは民族の恨みという問題だけだということが理解できました。ここに至り、私は、米国に保護された昭和天皇は生前にしっかりと謝罪を行い、手本を示すべきだったと思いました。

### MIHO ミュージアム

東京という大都会を遠く離れ、京都附近の清水寺で着物を体験しました。清水寺の他には、妙心寺退蔵院も参拝しました。坐禅を指導して下さった和尚さんは、堅苦しいイメージをいくらか少し取り除いて下さったように思います。笑顔ははっきり見て取れましたが、その真剣な説明と実施の際の取り決めには、安心するとともに尊敬の念が



生まれました。京都の寺院で目にした庭園も印象深く、輝くような紅葉は、とても見尽くすことのできない美しさでした。

### 三、日本の農家との交流：

Y家は夫婦と息子さん3人の小さな家庭ですが、息子さんは少し出てきて挨拶をただけで、その後はずっとYご夫妻との交流となりました。日本の旧跡やその保護、修復技術は本当に噂に違わないものでした。一夜を過ごした日野町は、道路の配置が江戸時代と変わっていませんでした。(ハイブリッドカーが江戸時代の建物の間を行き来しているのも面白かったです) 地元の方々が従事している家業や技芸、建築なども実際に祖先から受け継いだものです。残念だったのは、若者が



そこから離れてしまい、伝統文化が失われてしまっていることです。

#### 四、東京の感想：

山手線のおかげで、二晩の自由時間では新宿、渋谷の繁華街を歩くことができ、その後は品川駅のホテルに戻りました。新宿で移動していると、選挙のような群衆を目にしました。その中で、全身を鹿目まどか（訳注：アニメのキャラクター）のピンク色の服に身を包んだ女性がビラを配っていた姿が特に目を引きました。新宿で印象に残ったのは、巨大な新宿駅や、デパート、家電量販店などです。渋谷では、おしゃれな服を着た若い男女ばかりを目にしました。奇妙なギャルにナンパされたような気がするのですが、何かトラブルになることが怖く、言葉もわからなかったので、立ち止まってお話ししなかったというエピソードもありました。

書店では、書籍の分類が非常に細かく正確なこと、店内で立ち読みしている人が多いこと、中古市場の規模がとても大きいことを目にしました。一冊 105 円の古本屋に行きましたが、CD、DVD、BD なども販売していました。全体がレンタルショップになっているビルにも行き、掘り出し物を探したいと思いました。渋谷のある書店で本を買ったとき、うっかりしていて閉店前の最後のお



客さんになっていましたが、店員さんはきちんと対応してから閉店してくれました。

浅草寺では台湾の夜市に似た雰囲気を感じました。ぎっしりと両側に並んだ店を見ながらぶらぶらと歩くことができ、ブランド品や扇子、服、アクセサリーなどが売られており、食べたり遊んだりすることができます。近くには商業地区が形成されており、寺を中心として、台湾の龍山寺のような雰囲気があります。多くの観光地や博物館、駅では犬のようなマスコットをたくさん目にしました。コロコロとした姿でぬいぐるみにもなっていました。全体で企画した後、一斉に採用したのだろうと思いました。

東京スカイツリー、東京タワーは東京の市街地から簡単に見つけることができますが、じっくり撮影する機会があったのはスカイツリーの下にいた時で、東京タワーを撮影する機会があった夜、私はホテルから出ませんでした。スカイツリーに登ったときの感覚は、台北 101 と大差ありませんが、エレベーターは素晴らしく、ぎっしりと乗り込んだ見物客を乗せてすごいスピードで上昇しました。お土産は、スカイツリー限定版の東京ばな奈くらいしか印象に残っていません。

スカイツリーの下にある店を見る時間を犠牲にして、新宿の映画館「新宿バルト9」に駆け込み、先を争ってエヴァンゲリオンの第3作を鑑賞しま





した。今回、日本の映画文化については、券売機が先進的で、飲食物がとても高く、ロビーは小さく、周辺には独立した店がたくさんあることに気づきました。予告編の上映前には話し声も聞こえました。予告編の内容も豊富で、本編は最初から最後まで静まり返っていて、映画に没頭することができました。画質、座席、音響は言うまでもありませんが、前の椅子にあるカバンをかけるためのフックはとても素晴らしい気遣いだと思いました。

#### 五、日本社会への感想：

夜半に駅にいる日本人は、お酒を飲んできた様子で、複数人で大声、小声で話しながらフラフラと歩いています。これが、彼らの集団生活であり、毎日の仕事の重要な一部分のだろうと思いました。

繁華街では、コンビニの数は台湾と変わりませんが、店の種類は台湾よりもやや多いようです。コンビニは台湾と最も似通った部分だと思います（そもそも同じ企業がコピーしたものですから）が、レジの雰囲気、列の作り方、お金の受け渡しの仕方といった細かな気配りが多く見られました。

日本の様々な姿の人は、皆身なりをきれいに整え、颯爽とした面持ちをしています。夜中も忙しく働く労働者たちも、秩序よく、協力して仕事をし、髪型も実におしゃれです。やや鋭く力強い（直接目を合わせるのははばかられますが）目線に、少し

ずつ日本人の特徴がわかってきた気がしました。

アニメやマンガは生活の一部として融合しており、これほどの情報量の中では、もはやあまり認識していなかったり、まったく知らないということの方が不思議なくらいになっています。大量の広告やお知らせは図案で提示されています。また、選挙ポスターの貼られる位置や数も実に正確で、目を引き、美しく、無駄がありません。看板を並べる方法で、互いに干渉しないようになっており、相争って目立とうとし、ライバルを覆ってしまうような台湾の方式よりも良いものです。人に迷惑をかけないという気持ちの現れでしょう。日本でトイレに行き、入浴し、眠るのは本当に幸せなことで、引きこもりがいるのも無理はありません。飲み水にもあまり悩む必要はなく、暖房や、ハイテク便器などはもはや反則的ですからあります。

日本の道路は実に複雑で、高架橋あり、歩道あり、歩道橋あり、インターチェンジあり、踏み切りあり、さらには地下道、地下鉄、複雑な線の描かれた道路や川など、バスの運転手さんが私達を乗せてやすやすと東京都内を行き来するのには、本当に感心してしまいました。観察していると、東京ではダウンジャケットを着ている人は多くなく、目立つ色のダウンを着ているのは観光客である可能性が高いです。何枚も重ねた上着やブーツを多く見かけました。また、冬に女子高生が超ミ





ニスカーを履いているというのも実話でした。滋賀県で見かけた中高生は、比較的厚着でした。

#### 六、日本の行動の価値観への感想：

電車、新幹線はとても静かで、特に日本人は皆眠っていました。しかし、席を譲るという行為は見られませんでしたが(台湾のメンバーが先に譲っていました)。どちらかという、乗客はそのまま立っていればよいと思っているようです。

日本人は毎日6時過ぎに起きて、元気満点の日本式朝食から始まり、新聞を購読する習慣があります。店は大体8時から9時に閉まってしまう。今回聞いたところによると、通勤に1、2時間かかるのはごく普通のこと、仕事の他にも、リラックスしたり、家族と過ごしたり、レジャーに割く時間も必須です。これも、適切なときに適切なことをするという事なのでしょう。正しい時間に、正しい体で、正しいことをするという事です。

#### 七、日本の美食についての感想：

今回食べた美味しい食べ物はいくつかありますが、共通するのは、盛んな飲酒の文化と順序の美学が織り交ぜられていることです。初日の夜の歓迎会は、居酒屋体験でした。全部で10種類ほどの創作料理で、お酒によく合う肉や揚げ物、生もの、きれいに作られた料理やデザートなどがあり、

東西のエッセンスがすべて揃っているといえるものでした。前菜の山芋には卵が入っていて、とても美味しかったです。特筆すべきは、ビールやウォッカ、ウイスキーや日本酒、カクテル、ソフトドリンクなど、すべて飲み放題だったことです。

送別会は大阪の中華料理レストランで、台湾料理を体験しました。ほとんど台湾のレストランと変わりませんでしたが、下処理された毛蟹を道具で簡単に身をほじくって食べることができるというのは初めての体験でした。また、大腸麵線も食べました。ある夜、楊国松やメンバー達と本格的な居酒屋を体験し、機械で注文したり、ビールの飲み放題を選んだりもしました。その時は本当に足元がおぼつかなくなるくらいまで飲みましたが、気持ち悪くなったり、人に迷惑をかけたりすることがなかったのは幸いでした。注文した焼き鳥は肉汁が多く、卵焼きや豚肉を焼いた料理も素晴らしかったです。ホテルは毎日ビュッフェで朝食を食べましたが、二種類あって、ひとつは日本の伝統的朝食で、魚、漬物、味噌汁、ご飯、納豆、温泉卵などがありました。洋風はサラダ、パン、煮込み料理、蒸し物、焼き物、肉類などがありました。このような朝食を毎日食べることはできませんでしたが、特に牛乳が美味しかったです。

ある日の昼食は大地の贈り物というレストランで、朝食に似たビュッフェ形式でしたが、新鮮さと健康が強調されていた点がやや異なります。特に、日本式のお菓子は地元の黒糖が使われていて、本当に美味しかったです。東京で食べた別の昼食は、外観は西洋レストランのような店で、食べきれないほどの刺身が乗ったちらし寿司で、素晴らしく完璧な定食といえるものでした。しかし、コーヒーの種類が少なすぎ、アイスコーヒーがなかったことが印象に残っています。京都の近くでは洋食を食べ、メインディッシュはハンバーグステーキでしたが、これまで食べた中で一番美味しいハンバーグで、パンも絶妙、おかわりも自由で



した。また、スタッフの態度もやはり素晴らしく良かったです。

3つの大学でのレセプションはすべて立食で、乾杯のために大量のビールが用意されていました。食べたものはどれも似通っていましたが、神奈川大学と立命館大学ではお寿司が比較的多かったです。立命館のお寿司は本当に美味しく、食堂も大きかったです。大学での交流レセプションでは、西洋風の料理が主で、和食はあまり多くありませんでした。

農家でのホームステイで食べたお寿司には驚きました。刺身、錦糸卵、海苔、酢飯、棒ダラ、醤油などをそれぞれ別のお皿に盛り、好きなものを巻いて食べることができました。これまで食べた中で、一番新鮮で、一番美味しいお寿司でした。

お米は一流、味も一流、新鮮さも一流、選択も一流でした。農家ではその場で焼くお好み焼きと広島焼きも食べました。美味しかったです、すぐにお腹いっぱいになってしまい、漬物の入った昔ながらのおにぎりも食べました。ビール、日本酒、日本茶も沢山飲みましたよ。

ある日の朝食は、出前のサンドイッチとジュースで、モスバーガーをさらに豪華にしたようなものでしたが、伝統的な赤い箱に西洋風の朝食が詰められたものが届きました。バスで、コンビニで予約していた高級なお弁当も食べました。日本のお弁当は副菜が多く、主菜もとても美味しかったです。これであまり高くなければ、もっと好きになっていったと思います。

映画館のカフェで食べたベーグルと紅茶は高くても美味しかったです、8の字型の容器とサービスの態度はとてもよく「デザイン」されていました。

比較的体にやさしいのは、湯葉料理と精進料理です。湯葉料理はすべて豆腐で作られ、およそ8種類の料理がありました。温度と味付け、作り方の違いから、一皿一皿のごちそうへと進歩してきたものです。特に美味しかったのは、ごまだれと柚子胡椒のついた豆腐でした。精進料理はお寺で提供している素食で、見どころはピーナッツのタレを使った芋で、こんなに美味しい芋は食べたことがありませんでした。他は、日本のお米、漬物、



デザートなど、どれも美しく繊細に作ってありました。

#### 八、まとめ：

初めて訪れた日本での9日間の旅行は、今年参加した院生の一人として、私にとって大きな意義のあるものでした。初めて自分の知識、学んできたこと、長年勉強した日本語を活かすことができ、日本人の友人や日本文化に自ら接して交流したことで、非常に満足し、勇気をもらいました。今回は関東、関西の最大都市を訪れましたが、今後は、日本の他の都市に行く機会があればと思います。修士課程で、今後のさらなる良い関係のため、学問に邁進するこの数年間でさらに努力して、双方の関係のために努力したいと思っています。

## 2012年台湾大学院院生訪日の感想

国立政治大学 日本研究所  
修士課程1年 楊国松



1997年、まだ中央警察大学で勉強していた頃、そして初めて日本という美しい国を訪れた頃、学校の交換留学生として、九州の別府で一ヶ月あま



りの日本語学習体験をしました。そこでは日本の歴史、人文、文化だけでなく、流行産業についても大いに興味を持つようになりました。卒業後は警察で働きましたが、仕事がどれだけ忙しくても、毎年時間を作っては日本へ旅行に行っています。

2012年、幸運なことに交流協会主催による「台湾大学院生訪日団」に参加することができました。全国各地の大学院のエリート達が集まり、日本へ行って論文を発表し、学術交流を行いました。台湾に戻ってから今まで、この9日間、美しい日本の国で起こった全てのことを、美しい夢のように繰り返し思い返しています。

初日、東京品川のホテルにチェックインし、交流協会からは「手作り日本料理」による歓迎会を開いて頂きました。東京本部のK部長の親しみやすくユーモラスな中国語の挨拶の後、訪日の日程が賑やかな雰囲気の中で幕を開けました。翌日は、東京大学本郷キャンパスという日本で最も優秀な学生たちが競う殿堂に行き、「赤門」という狭き門を仰ぎ見ました。大きくはありませんが、目を閉じて「天下の英才はことごとく東大より出る」という言葉を思いました。一億三千万近い人々の中で、どれだけの学生が東大に進むことができるのでしょうか。どれだけの試練を経れば、衆を抜き出て、万人の上にある東大の人物となれるのでしょうか。

今回の訪日で、私にとって最も特別なのはやはり東京スカイツリーです。ここ数年、日本が観光資源開発として東京に新たなランドマークを建て、今年（2012年）完成したものです。てっぺんに登り、品川の方向を眺めると、かなり低くなってしまった東京タワーを見つけました。日本の戦後復興の象徴は、オレンジ色をして静かにそびえ立っていました。目もくらむような鮮やかな大迫力の夜景の中で、やはりその存在は無視できません。スカイツリーの頂上に立ち、思う存分目を楽しませた一方で、自分が日本の新たな時代のス

タート地点に立っていることを思いました。

学術論文発表、つまり今回の訪日の核心が日に日にやってきました。各校の実施方式はそれぞれ異なっており、東京大学の川島先生は学生の自由に任せ、評論も同校の博士課程の院生が行い、質問していました。全てのテーマが東大の院生と博士生の主導で行われ、東大の自由な学風が存分に発揮されていました。「神奈川大学」の佐橋先生は流暢な英語で全ての進行をされ、関西の「立命館大学」では足立先生・本名先生のお二人が交互に質問を行い、池田前交流協会代表が総括をされました。19人の大学院生代表団のメンバー達は、それぞれの頭脳に衝撃と洗礼を受けていました。異なる国の院生が、同じ問題に対して異なる見解と視点を持つことを理解し、本当に今回の訪日には意義があったと感じられました。

政府機関への訪問では、防衛省の研究機関から台湾には存在しない科学技術振興機構、中央の霞が関の経済産業省までにも行きました。日本の官僚の方々は、訪問した私たち台湾の院生訪問団に十分な資料を用意して下さいました。対談と質疑応答の厳粛さ、各プロセスの正確さと周到さが強く印象に残りました。霞が関の庁舎ビルからは国会議事堂を眺めることができました。ちょうど総選挙を控えている時期でしたが、台湾の選挙期間のようなお祭り騒ぎの賑やかさはなく、政権交代を控えている秋の雰囲気は少しも感じられませんでした。日本人は政治に対して冷淡なのか、それとも民主的素養が高いことの現れなのかはわかりませんでした。

京都へ行ったのは、ちょうど紅葉のシーズンで、昨年(2011年)4月に嵐山に花見に行き、小さな列車に乗って嵐山の峡谷の美しさを味わったことを思い起こしました。やはり観光客でごった返していましたが、世の中は時と共に移り変わり、人も変わっていきます。桂川の渡月橋で、自分のカメラでその全てを撮影していましたが、内心の思

いの起伏や思うことも多く、ほんやりと、散ってもなお直立している対岸の楓の木を眺めていました。まさに心中のもの寂しさを表す風景で、寒風が一吹き襲ってくると、私も上着をしっかりとかき合わせました。最初に集合場所にやってきたメンバーは、もう一度桂川を見ようと振り返っていましたが、今年自分の身に起こった人事異動にはすでに平気で向き合うことができるようになりましたが、いつの間にか涙がこぼれていました。

その後、滋賀県日野町の民泊先の家庭を訪れ、私と台湾大学の林宣佑、東呉大学の彭凡の3人は、Mさん一家4人(お父さん、お母さん、娘さん、おばあさん)のお宅に泊めてもらうことになりました。MさんはNTT(台湾の中華電信に相当)を退職され、竹細工を趣味にしています。普段は奥さんと一緒に裏庭で作物を植えて、自給自足をし、可愛い娘さんもおられます。高校卒業後にJR(日本の国鉄)に勤務しているそうで、このことについて私はMさんに日本社会の観点を質問しました。Mさんによると、日本ではごく当たり前のことだそうです。大学に入るのは自分の他の分野での能力を伸ばすことに他ならず、人脈を広げて社会での競争力を高めることにもなります。Mさんの考え方は台湾社会の、高校生は卒業後に進学をせざるを得ないという宿命とは明確に異なっています。また、日本の環境エネルギー政策が着実に推進されていることについても、目を見開かれる思いがしました。M家では太陽電池パネルを取り付け、自給自足を以外にも余剰電力を電力会社に売っているのだそうです。台湾でも参考にするに値するエネルギー政策だと思います。M家では、一宿二食だけお世話になりましたが、こういった活動が初めての私たちにとっては、全く新しい感覚があり、M一家と私たちは台湾で会うことを約束しました。これも一種の国民外交なのでしょう。

妙心寺の「坐禅体験」では、和尚さんが「警策」



で後ろから「激励」として叩いて下さいます。坐禅での呼吸、そしてしっかりとした姿勢で魂を浄化するというトレーニングは、遠く台湾から学びに来たものにとって、実に豊かな文化的饗宴でした。黄、赤、茶色など、きらびやかな色彩の入り交じる紅葉の寺の中で、私たちは寺の「瓢鮎図」を眺め、和尚さんはこの漁師が真理を追究する意義を熱心に説明して下さいの話を聞いていると、まるで日本の数百年の時空を超えたような感覚がし

ていました。古今の交錯する静かな寺にいと、長く世俗の世界で乱れてしまった心が、少しずつその霊性によって浄化され、癒されていくような気がしました。

最後の夜、わが国の大阪弁事処の処長が自ら送別会を開いて下さり、特別に在日台湾人のコックによる大腸麵線を振る舞って下さいました。ふるさとおなじみの料理が出てきて、皆驚き、乾杯してともに飲みました。しかし、旅が終わりに近づいていること、別れを告げる時間であることも知っていました。

この世に終わりのない宴会はありません。驚きと不思議の冒険の時間は短いものでしたが、毎日とともに過ごし、私たちは友情を深めることができました。特に、交流協会が心を込めて日程をご手配下さったことで、今後、メンバーはそれぞれが自分の分野で、全力で日台の友好関係を促進し、日台交流の土台としての役割を発揮してくれるはずです。

## 台湾内政、日台関係をめぐる動向（2013年1月上旬－2013年3月上旬）

### 江宜樺内閣の成立と第四原発建設反対デモの実施

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）  
（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

旧正月前に陳冲行政院長の辞任、江宜樺副院長の院長昇格をはじめとする内閣改造が報じられ、春節明けの2月下旬に正式に新内閣が発足した。台湾で建設中の第四機目の原子力発電所（略称「核四」）の建設にかかる問題で、江院長は今夏にも住民投票に付す意向を表明した。また3月9日には、台湾各地で第四原発建設反対にかかる大規模なデモ行進と抗議集会が実施された。

1月24日に尖閣諸島の領有権を主張する活動家による「保釣活動」が行なわれ、日台双方の公船が対峙する場面があった。2月下旬の安倍総理の訪米が台湾でも大きく報じられた。

#### 1. 江宜樺内閣の成立

去年は総統選挙の年であり、1月の選挙で再選を果たした馬総統は欧州の債務危機を始め厳しい経済情勢に対応するため、春節前に内閣改造に着手した。その陳冲内閣は、台湾社会の懸案問題となっている年金改革の方向性につき江宜樺副院長らとともに1月30日に説明をしたが、その翌31日に陳行政院長の辞任（総統府資政に転任）、江副院長の昇格、毛治国交通部長の副院長就任などの人事が発表された。<sup>1</sup>

陳院長の辞任の理由は、段階的任務の完成と「健康上の問題」であるとの説明がなされた。他の閣僚人事は、昨年と同様に翌日から小出しに発表され、翌日2月1日に交通部長、行政院秘書長、彭淮南中央銀行総裁の続投が報道され<sup>2</sup>、3日には経済建設委員会、経済部長などの経済閣僚の内定人事が報道された。<sup>3</sup>その後、陳内閣は7日に総辞職し、翌8日の朝刊には閣僚全員の卒業記念写真が掲載された。しかし、陳院長は、「内閣はすでに総辞職を提出したが、政務は一日たりとも停滞することは許されない」として、春節休みが明け

る18日の新内閣成立まで職務を全うするよう呼びかけた。<sup>4</sup>

内閣総辞職の7日、有線テレビのインタビューを受けた馬総統は、江次期院長について、「思慮深く、応答もてきぱきとしている、周囲に対しても誠実な正統派の人物である」と指摘するとともに「彼の職歴は行政院の施政全般を見渡す職務（研考会主任委員）を経験し、不動産取引の透明化（内政部長）、年金改革の推進（副院長）など重要な仕事を成し遂げるなど十分な能力を有していることが証明されたので彼に組閣してもらうことにした」と江次期院長に信頼を寄せていることを強調した。<sup>5</sup>また、米国留学博士、大学教員という馬総統と類似の背景を有する人物ばかり抜擢しているという批判については、「私は彼（江次期院長）と似ているところもあるが、似ていないところもある。しかし、（自分が副総統に抜擢した）呉副総統は私と似ているだろうか？」と一部の批判者の指摘に対して反駁した。

江次期院長に関しては、筆者は本誌で以前から馬総統の信頼が厚く、将来も嘱望されている人物であると紹介してきた。表1の経歴に示したよう

に江氏は2008年の馬政権成立とともに研究発展  
 考核委員会主任委員（閣僚に相当）として入閣後、  
 内政部長、行政院副院長を歴任したが、最近では  
 困難な年金改革の方向性のとりまとめを行い、馬  
 総統、陳院長の下で重要な任務を全うしたとみな  
 された。<sup>6</sup>米国留学博士、大学教授という馬総統  
 と似た経歴から「小馬英九」と形容されることも  
 あり、昨年国民党に入党したことから、馬総統は、  
 同人を次期台北市長か新北市長の候補に推そうと  
 しているとの憶測も囁かれたが、今般行政院長の  
 就任により、北部の直轄市長候補だけでなく、「吳  
 敦義現副総統モデル」により、次期副総統候補と  
 して2016年の総統選挙に臨む可能性も指摘がさ  
 れた。<sup>7</sup>江氏は大学教授の身から4年数ヶ月の間  
 に直通エレベーターで出世街道を最上階まで登り  
 つめた結果、53歳という台湾憲政史上過去半世紀  
 において最も若い行政院長が誕生することとなっ  
 た<sup>8</sup>

副院長に就任する毛治国氏は、交通部での勤務  
 が長く、国民党政権発足後閣僚の中で唯一異動の  
 なかった人物であったこともあり、馬総統の信頼

が厚いとみなされてきたものの、今般の改造で副  
 院長へ昇格したのは少々意外なものとして報じら  
 れた。<sup>9</sup>しかしながら、同人は米国留学時代から  
 馬総統と知己の関係であり、馬総統が台北市長時  
 代に政務官として同人の起用を考慮したことも  
 あったとされるなど、能力は広く認められ、馬政  
 権下の劉兆玄内閣で劉氏に仕事ぶりを認められた  
 とされている。また今回の「江毛正副院長コンビ」  
 の発足は、社会福祉問題への取り組みと、観光産  
 業の振興に傾注するとの分析がなされた。

9日から17日の春節休みが明けた、18日に江  
 宜樺内閣が正式に成立した。今回の改組は表2に  
 記したように院長、副院長、交通部長等一部の人  
 事異動に収まった。

馬総統は新内閣のメンバーに対し、「最も重要  
 なことは経済振興であり、今年中に自由経済模範  
 区の推進や年金制度改革の立法化などに取り組む  
 必要がある」と檄を飛ばした。また江院長は、「創  
 新」、「変革」の内閣が必要として、閣僚に対し「任  
 期の長さを問われるのではなく、任期中にどれだ  
 け意義ある仕事を成し遂げたかを尋ねられるよう

表1 新行政院長、副院長の経歴

	学 歴	経 歴
江宜樺行政院長 	台湾大学政治学学士、修士 イェール大学政治学博士	中央研究院 台湾大学教授 研究発展考核委員会主任委員 内政部長 行政院副院長
毛治国副院長 	成功大学土木工学学士、 アジア工科大学院修士、 マサチューセッツ工科大学博士	交通部観光局長 交通部次長 中華電信理事長 交通大学教授 交通部長

になるべき」と仕事への取り組み姿勢を強調した。<sup>10</sup>かかる雰囲気触発されてか、管中閣経済建設委員会主任委員は、就任直後に2013年の経済成長率と失業率を4%前後に落ち着かせたいとの希望を強調した。2012年の経済成長率が1.25%、失業率が4.24%という数字を踏まえると、昨年第四期から回復した景気を持続、加速させることで4%という数字に近づく意欲を語ったが、昨年末に経済建設委員会自身が打ち立てた目標である経済成長率3.8%、失業率4.1%と比べてもかなり高いハードルであり、新内閣の野心が伺えると『聯合報』は論じ、期待感を示した。<sup>11</sup>

TVBSの世論調査センターは、内閣改組後の2月5日に、馬総統に対する満足度調査を行った。馬総統への満足度は14%と先月と比べて変化はなかったが、不満足度は64%と3%下降した。江院長に関しては、「江氏が行政院長に就くのは適任だと思うか否か」という設問に対し、「意見なし」という様子見の回答が57%であったのに対し、「適任だと思う」が19%、「不適任だと思う」が23%と「低空発進」の結果となった。<sup>12</sup>しかし、2月下旬に内閣が正式に発足し、江院長が第四原発の建設の継続の可否につき住民投票に付すことを表明

した直後の調査では、「適任だと思う」が12ポイントも上昇し、「不適任だと思う」を10ポイント以上も上回る上々の滑り出しとなった。<sup>13</sup>

## 2. 民進党による大規模抗議活動の実施

民進党は、「無能な政府」と支持率の低迷する馬総統の施政に対する不満の声をあげるために、12月末から年初にかけて各地で抗議活動を行い、1月13日には台北市内で大規模な抗議デモと集会を行うと発表した。<sup>14</sup>林俊憲報道官は今回の一連の活動の主軸は「我々は怒っている！生活をしなければならぬ！民主が必要である！改革が必要である！」であり、12月中旬から約1ヶ月の間に台湾各地10箇所で開催して気勢をあげると説明した。その後、年末年始にかけて、桃園、台中、宜蘭、雲林などで抗議集会を行った。

1月13日、民進党は台北市で「人民は怒っている、馬総統に抗議する」をスローガンとした抗議活動を実施し、デモ活動に参加した民衆は大声で「馬総統を罷免しよう」などとシュプレヒコールをあげた。民進党によれば、今抗議活動への参加者は20万人を超える規模になったとの説明がされた。<sup>15</sup>（台北市警察局の推計では約93000人と

表2 行政院の主な人事異動

役職	新任者と前職	前任者
行政院院長	江宜樺（行政院副院長）	陳冲
行政院副院長	毛治国（交通部長）	江宜樺
行政院秘書長	陳威仁（臺北市副市長）	陳士魁
經濟部長	張家祝（中華航空理事長）	施顏祥
交通部長	葉匡時（交通部次長）	毛治国

資料元：行政院「内閣閣員」<http://www.ey.gov.tw/cp.aspx?n=3EA60BA0B2A3AF8B>

表3 江院長が適任度に関する世論調査

調査日	適任	不適任	意見なし
2月5日	19%	31%	57%
2月25 - 26日	31% (+ 12%)	20% (- 11%)	49%

資料元：TVBS世論調査中心「核四公投爭議」（2013年2月26日）

[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf) TVBS「」

発表。)同日夜に開催した抗議集会で蘇主席は、「無能な馬英九政府を交代させ、政策を換え、内閣を換え、立法委員を換え、総統を換えるために立ち上がろうと」支持者に訴えた。<sup>16</sup>抗議集会を視察した筆者は、台湾団結聯盟の服を着た関係者が馬総統の罷免にかかる署名活動をしているのを目撃したが、蘇主席は馬総統の罷免だけでなく、馬政府の政策に同調する改革に反対する立法委員の罷免の署名活動も推進する意向を示した。<sup>17</sup>中華民国憲法によると、総統の罷免案にかかる立法院での提案は就任1年後以降に可能となるので、民進黨は5月20日以降に立法院で総統罷免案の提出を準備する意向であると報じた。<sup>18</sup>

一方批判を浴びた政府は、13日夜10時半に、総統府、行政院、国民党が同時に声明を発表し、「今般の民進黨のデモ活動は、台湾内部の消耗であり、いたずらに住民の間に不要な対立と憎しみを煽るもの」と指摘したほか、「民進黨は政権を執ることだけを考えており、今般の活動も政治的な目的が明らかである」と批判した。<sup>19</sup>

デモが実施された1月中旬は、景気回復の兆しが見え始めた時期であり、従来の緑軍支持を超える台湾住民が積極的にデモ活動に参加したように思えなかったのは筆者だけではあるまい。

### 3. 第四原発建設反対デモと住民投票問題

#### (1) 江院長による第四原発建設問題を住民投票に付す表明とその余波

新内閣の任務は、過去の内閣と大同小異で経済振興が第一に置かれるが、原発政策が大きな課題として浮上した。2月23日に行政院政務首長検討会に出席した馬総統は祝辞で世論の関心の高い、現在建設中の台湾で四機目の原子力発電所「核四」の建設につき、「右は1992年に建設工事が復活してから、20年あまりになる。右問題は年金改革と同じように、難しい問題であり、いかなる決定をしても賞賛されることはないが、国家の将来

のためには建設か廃止かを必ず決定する必要がある」として、他の公共政策とともに政策執行時には「様々な意見に謙虚に耳を傾け、詳細な研究を行い、幅広く意思疎通を行い、慎重に決定する」姿勢が重要だとの認識を示し、政府関係者に十分な検討を求めた。<sup>20</sup>馬総統の発言に対し、江行政院長は、「政府の原発政策は一貫している」として「安全が確保されなければ、第四原発の建設もない」とし、第四原発の安全性が確保されない場合は、稼働はしないとの従来の立場を強調するとともに、原発の所管部門である経済部に対して第四原発の検査と監督を責任をもってやらせ、各方面の専門家の意見を聞き入れるよう指導したと説明した。<sup>21</sup>翌24日には張家祝経済部長が就任後初めて第四原発の建設現場を視察したほか、反原発団体の関係者からも意見聴取をする予定であるなど、「反対意見も含めて幅広く意思疎通を求めている」姿勢が報じられた。<sup>22</sup>

さらに26日には、馬総統、江院長ら総統府、行政院首脳は第四原発の建設に関し検討し、江院長が右問題を住民投票に付すことに決定した旨表明した。<sup>23</sup>民進黨は党是として「非核国家の建設」を抱えているところ、長年反原発運動には関与、支持し、昨年総統選挙においても蔡英文候補(当時)は政策文書で2025年の非核化などを強調している。<sup>24</sup>

政府による住民投票推進の動きに対して民進黨は、「台湾住民は原子力災害におびえて生活することを明確に拒否している」として「住民投票に付すのであれば、先に関連予算の凍結と工事を停止し、住民投票の成立条件を民意を反映した形に引き下げるべく住民投票法の修正にかかわるべきである」との声明を出した。<sup>25</sup>一方で馬総統はじめ政府首脳は、住民投票に付すことを表明したが、政府の立場としては、引き続き建設することを目指すことを確認した。<sup>26</sup>

3月1日、江院長は立法院で初めて委員の質疑

表4 第四原発にかかる事件簿

年	執政党	事 件
1980	国民党	台湾電力、第四原発建設案を提出、行政院は新北市貢寮区に建設を同意
1986	国民党	チェルノブイリの原発事故、立法院は第四原発予算を凍結
1992	国民党	郝柏村行政院長、第四原発関連の予算凍結を解除
1994	国民党	貢寮区で初の住民投票を実施、96%の有権者が反対票投じる
1996	国民党	立法院で第四原発建設計画廃止案が通過、行政院が覆議を提出、立法院の覆議案が通過
1999	国民党	原子力エネルギー委員会が第四原発の建築許可証を発行、建設が正式に復活
2000	民進党	張俊雄行政院長、第四原発の予算を執行しないと宣言
2001	民進党	大法官、第四原発建設停止は憲法違反の裁定、建設再開
2011	国民党	東日本大震災による福島原発事故発生、第四原発論争が再燃
2013	国民党	馬總統、第四原発の建設は完成させるが、稼働の可否は再評価することを確認
2013	国民党	江行政院長、第四原発建設の可否につき住民投票に付すことを表明

資料元：「核四停・建大事記」『聯合報』（2013年3月4日）頁5。

表5 第四原発建設に対する態度

	全体	台北新北基隆	民進党支持	国民党支持
建設継続	27%	27%	17%	51%
建設停止	58%	60%	76%	32%
意見なし	16%	13%	7%	17%

資料元：TVBS 世論調査中心「核四公投爭議」（2013年2月26日）  
[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf)

応答に答えたが、その際に「住民投票の結果、第四原発の建設が否決されれば、右政策を推進してきた政府の代表として職務を辞任する」との決意を表明する震撼弾となったと各紙は報じた。<sup>27</sup>右に対して民進党は林報道官が、江院長は「自分の職務を以って国民を（第四原発の住民投票に賛成するよう）恫喝するのか」と反駁するとともに右問題への理性的な議論をするよう呼びかけた。<sup>28</sup>

表4は第四原発の建設にかかる事件簿を記した。チェルノブイリ、福島原発事故が台湾社会に与えた影響は大きく、民進党時代には強引に建設を停止し、内政上の混乱を引き起こすなど政治化している問題でもある。

世論はかかる動きに如何に反応でしたであろうか。TVBS 世論調査センターは、2月25日から26日にかけて第四原発問題の建設にかかる調査

を行った。<sup>29</sup>表5はその結果であるが、「建設停止を支持」が過半数を超える58%で「建設継続を支持」の27%を大きく上回った。「意見なし」は16%であった。一方、地域別では第四原発の建設地である北部地域住民の建設反対が6割に達したほか、政党支持別でも民進党支持者は建設反対が76%と国民党支持者の32%をはるかに上回る結果になった。

(2) 第四原発建設反対デモの実施と政府の反応  
 反原発団体の発起による「309 全台廢核大遊行」（3月9日全台湾原発廃止を主張する大行進活動）が3月10日午後、台北、台中、高雄、台東など台湾各地で開催され、デモ参加者はそれぞれ、五大主張の「第四原発関連予算の追加を停止、第四原発建設の即時停止と第一、二、三原発の前倒し廢

炉<sup>30</sup>、蘭嶼島からの核廃棄物貯蔵施設の移転、政府の電力利用ゼロ成長政策の貫徹」を訴えた。抗議デモ主催機関の「緑色公民行動聯盟」によると台湾全島でデモ活動に参加した民衆は20万人を超え、反原発デモとしては史上最高人数となったと指摘した。<sup>31</sup>筆者が見物した台北のデモ行進及び集会場には、親子連れや学生が多く、台湾で頻繁に行なわれる抗議デモ、抗議集会と比べると政治的匂いが少なく<sup>32</sup>、様々な工夫を凝らしたファッションで写真撮影に興じる姿が散見されるなどお祭りのような雰囲気も漂っていた。

午後4時には、主催者側から、福島原発の事故を例に、もし建設中の第四原発（新北市貢寮区）をはじめ、第一原発（新北市石門区）、第二原発（新北市萬里区）で事故が発生したら、それぞれの場所から40キロ以内に位置する台北市中心部は被災地となるという事情を踏まえ、「原子力災害に警戒、特別区<sup>33</sup>を封鎖、第四原発建設を廃止し、台湾の原発をゼロに！」というスローガンを叫ぶ一幕があった。

同デモ行進には、事前には林志玲ら著名芸能人らがフェイスブックや微薄などの媒体で同活動への支持を訴えたほか、当日のデモ行進にも文芸界、芸能界などから多くの関係者が参加して現政府の原発政策を批判した。<sup>34</sup>民進党は蘇主席をはじめ、呂元副総統、蔡前主席、謝元行政院長ら大老も参加した。蘇主席は「今回のデモ行進は党派や年齢にかかわらず自発的な行動であり、江院長に誠意があれば、第四原発建設の停止を積極的に停止すべきである」と強調した。<sup>35</sup>

今デモ活動に対して、総統府は李佳霏報道官が、馬総統を代弁する形で以下のように述べた。<sup>36</sup>「馬総統は政府の原子力エネルギー政策は『電力不足にならず、合理的な電気価格、温室効果ガス削減を達成する』という前提で、『原発の安全性を確保し、穏健に原発への依存度を減じ、エコエネルギーの環境を作りだし、徐々に非核社会へと向

かう』であるが、非核社会の終極的目標に一気にたどり着くのは現在の状況では困難であり、政府は漸進的な方法で目標に向かうという立場である」。また本日の抗議活動に関しては、「台湾社会の成熟した市民のパワーを体現した」として尊重の意を表明するとともに、右問題に関し、「政府は引き続き民間の声に耳を傾け意思疎通を図るとともに、住民投票を通じて台湾住民に（第四原発の建設の可否に関する）決定をさせることで、20年にわたる第四原発の論争問題を有効的に解決したい」との指摘がされた。

また10日に国民党関連の会合に出席した馬主席は、第四原発建設の住民投票に関して、「現在の住民投票をめぐる状況は、徐々に原発依存度を減じるか即座に原発を廃止するかという二つの考え方である。原子力エネルギーは、現在のところ最も廉価でクリーンなエネルギーであり、政府は原発の安全性を確保するだけでなく、安全性が確保できないのであれば、第四原発が完成しても稼働はさせない、同時に最も正しいデータを列举し、十分な情報を提供することで、台湾住民に最後の決定をしてもらいたい」との見方を示すところがあった。<sup>37</sup>

今回のデモ活動は、原発を請け負う台湾電力公司による重なる工事の設計変更、ずさんな安全管理、不祥事などが明るみに出るたびに、度々台湾世論の批判を浴びてきたことに加え、2011年の福島原発事故の発生が台湾社会の原発に対する疑念を高めているという事情が大きく反映された。また昨年以来の不景気で雇用の不安定、賃金上昇の停滞といった労働者の不満が蔓延する中で、業績が悪くても、親方日の丸のごとく雇用が安定し、定期昇給する台湾電力の待遇の良さが世論の厳しい指弾に遭い「台湾電力叩き」の風潮が強まっていたことも無関係ではないような感がある。いずれにしろ、政府は近日中に立法院で与党国民党に住民投票にかかる草案を提出させ、早い時期での

住民投票に付す準備を進める予定である。第四原発の建設をはじめとする原発問題は、今年の台湾政治の主要イシューに躍り出た感がある。

#### 4. 台中市立法委員補選は国民党が勝利

##### (1) 現職立法委員の失職と与野党補選候補の擁立

昨年11月28日、顔清標立法委員は台中県議長時代にスナックの飲み代を公費で費消していた案件につき、最高裁は3年6ヶ月の有罪判決、公民権剥奪3年の判決を言い渡し、即日失職し、収監されると報じられた。<sup>38</sup> 顔委員は戒厳令時代に、当時の政府による超法規的な暴力団摘発の対象になり、政治犯が収容されていた緑島へ移送された経歴を持つ。その後、台中県議、同県議長を務めるなど地方派閥を代表する「土着性」の強いタイプの政治家として、長らく実質上無所属で活動してきた。2001年12月の選挙以降4回連続で立法委員に当選し、その間2008年6月には違法銃器所持等の罪で3年9ヶ月の判決を受けたものの立法委員の身分のまま同8月から収監されたが、翌年5月には仮釈放され、2012年1月の選挙でも再選を果たしていた。

有罪判決の出た翌29日には、同人らは家族会議の結果、顔委員の息子の顔寛恒が父に代わって出馬する「代父出征」になると報じられた。<sup>39</sup> その後、国民党は12月19日の中央常務委員会で、党内で他に立候補者がおらず党員資格を有する顔寛恒を正式に党公認候補に選出した。<sup>40</sup>

一方、迎え撃つ民進党は党内で有力候補3人に

よる支持率調査を行った結果、現台中市議の陳世凱の支持率が高かったとして候補に選出した。蘇主席は、「台中第二選挙区は民進党にとって厳しい選挙区であり、勝利は容易ではないが、陳候補は若く、前回の市議選挙において最高得票数で当選しており、期待する」と述べるどころがあった。<sup>41</sup> 同補選には、もう一名、「全民政党」からの参選者があった。

##### (2) 補選の結果

40日に及ぶ選挙戦で顔陣営は、父親の20年にわたる地方経営の実績を訴える一方で、馬総統の施政に対する不満の高まりを考慮して、馬主席は現地を遊説、応援することなく、国民党候補であることを前面に出すのを隠すように戦う姿勢が顕著であった。一方、負けてもととの民進党は、顔候補に対して「親父の権勢頼りの人物」との批判に加え馬総統と現政権批判を主軸にして、「今補選は馬総統罷免への第一戦」などと、政党対決色を強め、蘇主席のほか、蔡英文前主席、謝長廷元行政院長ら大老まで全党態勢で支援した。

1月26日に投開票された選挙は、実質上の国民、民進両党対決となり、顔候補が得票数1138票差、得票率でも0.86%という小差で陳候補を下し、翌朝刊主要三紙はいずれも「顔が際どい勝利」と報じた。<sup>42</sup> 投票率は48%、泡沫候補の全民政党候補は1283票（得票率0.96%）にとどまった。<sup>43</sup> (表6)

選挙結果につき国民党は曾永権副主席兼秘書長が、台中市の有権者に対して国民党候補への支持

表6 台中市第二選挙区における2013年立法委員補選と2012年立法委員選挙の比較

2013年1月立法委員補選		2012年1月立法委員選挙	
顔寛恒 (国民党)	陳世凱 (民進党)	顔清標 (無所属)	李順涼 (民進党)
66457 (49.95)	65319 (49.09)	118585 (59.79)	79730 (40.20)
1138 0.86%		38855 19.59%	
		得票数 (%)	表、得票率差

資料元：中央選挙委員会ホームページ「第8届立法委員臺中市第2選挙区缺額補選選挙結果」(2013年1月26日) <http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-20481.c4133-1.php>

に感謝するとともに、今選挙結果に満足することなく、引き続き地方の経営を強化し、基層に深く根をおろし、現実的な態度を以って更に多くの支持を獲得していきたいと述べた。<sup>44</sup>「栄誉ある敗戦」に終わった民進党は、蘇主席が「今回の選挙において有権者は国民党と地法派閥勢力に包囲される中で、勇敢にも立場を堅持し、民進党候補を支持してくれたが、当選することが出来ず遺憾である」と反省の弁を述べた後、「今選挙区では藍軍と緑軍の基礎票には20%近い差があったが、今回は千百数票差の惜敗となったが、この結果は現在の民意を代表している」と指摘し、「引き続き改革の列車は前進を続ける」と支持者を鼓舞した。<sup>45</sup>

今回の補選の観察として『聯合報』は「今選挙結果が政局に与える影響は限定的である」としながら、「国民党主席である馬総統があたかも『人間蒸発』したかのように表に出てこなかったのは、民進党の有力者がほぼ勢ぞろいしたのと比べると際立っていた」と指摘し、一方で顔父子は今選挙を「悲劇の親子が民進党に対抗する」という構図に引き込み、有権者の同情を買い辛勝できたと論じた。<sup>46</sup>『自由時報』は国民党が大きく得票率を落とした主因は馬総統の執政の失敗にあるとして選挙区の有権者の投票行動が変化したものではないと分析した。<sup>47</sup>匿名の国民党立法委員は、今補選の苦戦は馬政権のパフォーマンスに対する不満が有権者の士気に影響したと分析し、2014年の地方選挙（台中市長選挙等直轄市長選挙含む）は苦戦必至であると警鐘を鳴らした。<sup>48</sup>台中市選出の民進党籍立法委員の林佳龍氏は民進党が将来的に国民党に勝つ希望が見えたとして、基層組織と地方経営の強化が必要と述べた。<sup>49</sup>

今回の補選は、民進党が馬総統の罷免活動に向けて動き出すなど対決姿勢を旗幟鮮明にした後、初の選挙であったこともあり、民進党主席、行政院長経験者などが連日応援にかけつけるなど民進党陣営は相当力をいれたことから、マスコミは「総

統選挙並みの動員をかけた選挙」との説明もなされた。一方で国民党は、前述のように馬主席は後ろに退き、曾永権秘書長が陣頭指揮をとった。顔清標は、その経歴からも国民党ではなく、実質上無所属で活動し、著名寺廟の後援会などを中心とした組織戦で選挙は負けなしの強さを誇ってきたが、今選挙では、馬主席や現政権とは距離をおきながらも知名度に劣る実息が勝利したことは、父親が長年にわたって経営してきた資産が引き継がれたことが証明された。また通常、台湾での補選の投票率は4割前後だったのが、今選挙では約49%に跳ね上がったように、有権者の関心の高さと両陣営の力の拮据の強さが示された選挙であった。

## 5. 馬総統の開国記念日談話

馬総統は1月1日午前、総統府で中華民国102年開国記念式典と元旦の挨拶を行い、祝辞を述べた。<sup>50</sup>祝辞では、先に「今年の経済情勢は厳しいものであったが、今年の経済は昨年より良くなる」と強調するとともに、「時機をつかみ改革を加速させ、行動を奮い起こし四つの挑戦、『グローバルな産業競争の激化』、『自由貿易化が進行する趨勢』、『人材育成と産業が必要とする人材のアンバランス』、『少子高齢化』に立ち向かい、克服していくべきである」として、施政方針を強調するところがあった。

日台関係に関しては、尖閣諸島にかかる問題で、台湾側は「東シナ海平和イニシアチブ」を提起し、「主権にかかる論争を棚上げし、協力して資源開発を行なう」との原則で東シナ海を平和と協力の海にすることを主張するなどの従来立場を繰り返すと同時に、現在進行中の漁業交渉は非常に重要な起点となると強調するところがあった。

## 6. 中華保釣協会メンバーによる尖閣諸島海域の抗議活動

尖閣諸島の領有を強く主張する中華保釣協会メンバーは、1月24日未明に新北市の深澳漁港を出航し、尖閣諸島へ向かった。同協会メンバーを乗せた「全家福号」は、漁業の守護神として台湾及び中国東南部の福建、広東の沿岸部で信仰を集めている「媽祖」の神像を尖閣諸島に設置することが目的であると説明した。同船は24日の午前には尖閣諸島から西南17キロのところまで接近したが、海上保安庁船籍8艘に包囲され、放水により行く手を遮られ、撤退を余儀なくされ同日夜10時に深澳漁港に帰航したと報じられた。同活動について台湾メディアは、漁民保護を執行するために海巡署の艦船が5時間にわたって日本の艦船と追跡合戦を演じたと報じた。<sup>51</sup>またその際、中国の海監船が三隻出現したことで王崇儀・海巡署副署長は、中台が保釣活動を協力しているとの疑念を引き起こさないためにも、放送とLEDの電光掲示板を利用した方法で厳かに「魚釣島は中華民国の領土である！ここは中華民国の釣魚台海域であるから、すぐにこの場を離れなさいと警告した」と説明するところがあった。<sup>52</sup>台湾側の説明によると尖閣諸島海域で台湾、日本、中国の公務船が同時に出現したのは初めてのことである。

また同活動に参加した活動メンバーは、「海上保安庁の放水攻撃でエンジンを含め設備を破壊されたため、今回の活動は途中で断念を余儀なくされたが、3月以降天候が回復した後に、再度保釣活動を起こしたい」と春以降の活動を示唆した。<sup>53</sup>

今件が今後の日台漁業交渉に対する影響に関して、蘇啓誠アジア太平洋副司長は日本側は「(交渉に)影響する」と暗示し、第二回予備会談は恐らく延期されるだろうとの見通しを述べるとともに、「我が方は日本側が理性的、平和的な態度で事

態を処理し、漁業交渉の進展に影響させずに当初の計画通り、1月末か2月中旬に予備交渉を行いたい」と述べた。<sup>54</sup>また海巡署が同日開催した記者会見には、台湾、日本、中国はじめ18社のメディアが集まり、アルジャジーラの記者から「中国と日本の関係は最近緊張しているが、なぜ台湾はこの時分に介入したのか？」との質問が出た際に、海巡署関係者は「同海域はもともと我が国の領土であり、『介入』という問題は一切ない」と説明する場面があったと『自由時報』紙は報じた。<sup>55</sup>

また『中国時報』は、海巡署の船舶が尖閣海域で中国公務船に対して台湾側が同海域の主権を主張したことに対し、中国のネット世論が騒然となったが、中国政府はローキーな対応をして兩岸の間に対峙する雰囲気をかもし出すのを避けようとしたと論じるところがあった。<sup>56</sup>

## 7. 蘇貞昌民進党主席の訪日

蘇貞昌民進党主席率いる民進党代表団が2月3日から7日まで訪日した。訪日に先立ち、劉世忠同党国際事務部主任は、「今回の訪日は、日本の各政党との友好関係の継続と強化であり、自民党政権の復活後、安倍総理の民主、平和重視の呼びかけに応えるものであり、右を今訪問の主題とし、政策面での交流強化を目的としている」と指摘した。<sup>57</sup>また「内閣制を採用する日本との交流において国会議員との友好関係は、二国関係の増進に有益なものであり、民進党代表団の今回の訪日は蘇主席をはじめ立法委員、シンクタンク関係者を率い政党外交、国会外交、シンクタンク外交の実施である」と説明した。

2月3日、訪日に際し蘇主席は、「今回は党主席就任後初の海外訪問であるところ、我々と長期にわたり友好関係を保ち、なお台湾にとって非常に重要な隣国である日本を訪問することを優先的に選んだ」と訪日への意気込みを語った。<sup>58</sup>

2月3日の華僑関係者との会食で蘇主席は民進

党への支持に対する感謝を述べるとともに、「今後も引き続き民進党を支持していただき、2014年の直轄市長選挙を含む地方選挙で勝利し、2016年の国会及び総統選挙の勝利の基礎としたい」との意気込みを語った。<sup>59</sup>

4日、随行記者との懇談で今回の訪日の目標として「周辺国家の民主同盟を強化するとして、東北アジア地域の安全と繁栄をとともに維持するために民主、自由、人権を尊重する価値を有する米国、日本、韓国との関係を強化したい」と語った。<sup>60</sup> 右発言はかかる価値観を有していない中国を意識したものであることが容易に想起された。更に同日、日華議員懇談会メンバーと会見し、蘇主席は、「日華懇が日台関係において重要な役割を果たし、断交後の両国関係の緊密な往来を保つことに努力してきた」とその功績を称えた。<sup>61</sup>

5日朝、蘇主席らは安倍総理の実弟の岸信夫議員ら自民党の若手議員7名と朝食会を開催し、劉国際事務部主任は、右会合に関し「双方が次世代の議員間の交流を強化することにつき意見交換がなされた」と説明した。<sup>62</sup> また6日、自民党のシンクタンクである「近未来政治研究会」の最高顧問である山崎拓元副総裁らと会談した際に尖閣問題に触れ、「日台間で尖閣（釣魚台）問題についてはそれぞれ異なる主張があるが、地域の平和と安定を維持することに関しては、共通認識があり、双方は平和的な対話を通じて論争を和らげることが、両国の良好な関係につながる」と指摘し、「両国にとっての喫緊の課題である漁業問題に関し、双方のシンクタンクで議論を行い、今問題について促進させることが両国関係の発展に利益がある」と指摘するとともに、他国に付け入る隙を与えないべきではない」と述べるところがあった。<sup>63</sup> 蘇主席は同日、渡辺喜美みんなの党代表らとも会見し、中国の軍拡問題について意見交換した旨報じられた。<sup>64</sup>

訪日最終日の7日は、民間の発電所である江戸

川第一発電所を視察し、環境問題に関しNGO関係者と意見交換を行った。蘇主席は、江戸川住民が自発的に発電所を建設し環境保護運動に関与した姿勢を肯定するとともに、台湾住民に対し第四原発建設反対の連署に積極的に参加するよう呼びかけた。<sup>65</sup> また蘇主席はメディアからの今回の訪日の成果につき質問を受け、「今回の訪日は成功であり、予定通りの日程をこなし、期待通りの成果をあげることができた。今回の訪日は、政党外交、国会外交及びシンクタンク外交であり、我々は自民党、民主党、公明党、みんなの党のリーダーと会見、交流し、60名以上の衆参国會議員らをはじめ多くの建設的な意見交換を行うことができた」と成果を強調した。

現段階では次期総統候補ではない台湾野党主席という身分では、日本での取り扱いも限られたものであったが、2016年の国政選挙で政権奪回を目指す民進党にとって、蘇主席は蔡前主席ともに「唯二」の有力候補であり、その動向は注目しておくべき人物である。

## 8. 安倍総理の訪米と台湾世論の反応

2月下旬の安倍首相の訪米は、日米両国と緊密な関係を有する台湾でも大きな関心を以って報じられたが、関心事項や国際関係における台湾の向かうべき姿の違いから、異なる角度から報じられた。日本のマスコミは、共同声明で触れられたTPP問題に関しての報道がトップ扱いであったが、台湾では右問題は2-3番目に紹介されたにすぎなかった。<sup>66</sup> 以下、各紙の報道振りを簡潔に紹介する。

『聯合報』は、1面トップで日米首脳会談後の記者会見ではなく、安倍首相が米シンクタンクの戦略国際研究センター（CSIS：Center for Strategic and International Studies）で行った講演の中で「日本は今も、これからも、二級国家にはなりません。」「十分に強い日本を取り戻す」との発言を引

用し、詳しく報じた。<sup>67</sup>また同紙3面では、台湾の関心の持つ尖閣諸島の主権問題に関し、安倍首相が従来の立場を強調したほか、<sup>68</sup>右に対する中国側の反応として『新華社』が右講演内容につき「日本はどこに戻るのか？軍国主義にでも戻るのか？」と暗示したことを報じた。<sup>69</sup>

『中国時報』は、1面トップで「安倍は共同記者会見で尖閣諸島問題につき多くを語ったが、オバマは尖閣問題、日米安保問題につき触れなかった」として、日米首脳の今会談における重点にずれがあった点を揶揄したほか<sup>70</sup>、3面ではCSISの演

説における「私も日本も戻ってきました」という部分を写真入りで報じた。<sup>71</sup>

民進党寄り論調の『自由時報』は、三紙の中で唯一1面ではなく2面で日米両首脳が笑顔で握手する写真で日米関係の緊密さを訴えるとともに、安倍総理の「習近平総書記との会談を望む」という発言を報じるなど対照的な報道振りとなった。<sup>72</sup>

これらの違いは各紙の普段の「対中国融和度」、  
「尖閣諸島問題に対する厳しさ」の違い、読者層の違いをも反映したものであり、興味深く感じた。

- 1 「陳沖下台 江宜樞接閣揆」『自由時報』（2013年2月1日）頁1、「江宜樞、毛治國 正副閣揆」『聯合報』（2013年2月1日）頁1、「江宜樞接閣揆、毛治國副院長」『中国時報』（2013年2月1日）頁1。
- 2 「彭淮南續任央行總裁 陳威仁政院秘書長」『自由時報』（2013年2月2日）頁1、「陳威仁政院接政院秘書長」『中国時報』（2013年2月2日）頁1。
- 3 「張家祝掌經濟部 管中閔接經建會」『中国時報』（2013年2月4日）頁1、「經長張家祝 經建會管中閔」『聯合報』（2013年2月4日）頁1。
- 4 「內閣總辭 陳揆：政務不停頓」『自由時報』（2013年2月8日）頁2。
- 5 「馬：江宜樞有像我 也有些不像」『中国時報』（2013年2月8日）頁2。
- 6 「江宜樞 為年金改革火力全開」『聯合報』（2013年2月1日）頁3
- 7 「內定閣揆小馬英九江宜樞 躋身接班梯隊」『聯合報』（2013年2月1日）頁3
- 8 「書生從政 江宜樞 50年來最年輕閣揆」『中国時報』（2013年2月1日）頁2。
- 9 「毛治國 跌破不少人眼鏡」『聯合報』（2013年2月1日）頁3。
- 10 「江揆上任：重大議題設溝通平台」『自由時報』（2013年2月19日）頁3。
- 11 「管中閔喊『黃金交叉』」『聯合報』（2013年2月19日）頁1。
- 12 TVBS 世論調查中心「內閣改組後馬總統滿意度民調」（2013年2月5日）[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201302/pl86bjrha9.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201302/pl86bjrha9.pdf)
- 13 TVBS 世論調查中心「核四公投爭議」（2013年2月26日）[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf)
- 14 民主進歩党ホームページ「公佈『火大-作伙行』視覺及『火大列車』首波群眾大會場次」（2012年12月13日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6393](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6393)
- 15 「20萬人火大上街 高喊罷免馬總統」『自由時報』（2013年1月14日）頁1。
- 16 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌主席火大遊行晚會『人民火大，齊燃改革大火』演說」（2013年1月13日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6437](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6437)
- 17 「火大怒潮蘇促罷免總統立委」『中国時報』（2013年1月14日）頁4。
- 18 「滿意度13 臥蘇：馬總統下台吧」『自由時報』（2013年1月14日）頁3。
- 19 「府院黨批念茲在茲只有政權」『中国時報』（2013年1月14日）頁4。
- 20 總統府ホームページ「總統出席『102年行政院政務首長研討會』（2013年2月23日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=29271&rmid=514>。
- 21 「核四停建與否 馬提20字箴言」『中国時報』（2013年2月24日）頁2。
- 22 「張家祝向核安悍將林宗堯取經」『聯合報』（2013年2月25日）頁1。
- 23 「府院拍板核四訴諸公投」『聯合報』（2013年2月26日）頁1。
- 24 民主進歩党ホームページ「十年政綱 七、能燃」[http://10.iing.tw/2011/08/blog-post\\_16.html](http://10.iing.tw/2011/08/blog-post_16.html)
- 25 民主進歩党ホームページ「民主進歩黨對江揆關於核四講話的回應」（2013年2月25日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6494](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6494)

- 26 「馬重申：興建核四立場不鬆動」『自由時報』（2013年2月27日）頁3。
- 27 「公投結果 若決定停建核四 江宜樺：我辭職負責」『聯合報』（2013年3月2日）頁1。
- 28 「綠：江不該用官位恐嚇人民」『聯合報』（2013年3月2日）頁3。
- 29 TVBS 世論調查中心「核四公投爭議」（2013年2月26日）[http://www1.tvbs.com.tw/FILE\\_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf](http://www1.tvbs.com.tw/FILE_DB/PCH/201302/ff6iwp752m.pdf)
- 30 台湾電力の資料によると2018年以降、第一原発から旧原発は順番に廃炉し、現在稼動している中で最新の第三原発の2号機は2025年に廃炉予定となっている。参考「核四若停電2018年恐限電」『聯合報』（2013年3月2日）頁3。
- 31 「廢核大遊行 素人上街新頁」『聯合報』（2013年3月10日）頁1、「20萬人上街喊廢核」『自由時報』（2013年3月10日）頁1、「全台大遊行 22萬人喊廢核『這就是民意』」『蘋果日報』（2013年3月10日）頁1。
- 32 「反核20萬人站出來」『中国時報』（2013年3月10日）頁1。
- 33 通称「博愛特區」と呼ばれ、総統府をはじめ台北市中正区の国防部、外交部、最高裁判所など政府機関が集結している首都の核心地域を指し、日本では霞ヶ関に相当する。
- 34 「藝人嗆政府：不要核四拼裝車」『中国時報』（2013年3月10日）頁3。
- 35 「蘇嗆江揆：應主動停建核四」『自由時報』（2013年3月10日）頁6。
- 36 総統府ホームページ「總統府回應廢核遊行」（2013年3月9日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=29349&rmid=514>
- 37 中国国民党ホームページ「核四公投是穩健減核與立即廢核的選擇」（2013年3月10日）<http://www.kmt.org.tw/page.aspx?id=32&aid=9635>
- 38 「公帳喝花酒案定讞 顏清標失立委資格」『聯合報』（2012年11月29日）頁1。
- 39 「顏清標被解職 顏寬恆代夫出征選立委」『聯合報』（2012年11月30日、頁6。
- 40 中国国民党ホームページ「中常會通過提名顏寬恆參選台中市第二選區立委補選」（2012年12月19日）<http://www.kmt.org.tw/page.aspx?id=32&aid=8298>
- 41 民主進歩党ホームページ「民主進歩党第十五屆第三次中執會新聞稿」（2012年12月17日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6398](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6398)
- 42 「台中立委補選 顏寬恆險勝 綠小輸 1138 票」『自由時報』（2013年1月27日）頁1、「顏寬恆險勝 1138 票」『中國時報』（2013年1月27日）頁1、「中市立委補選 顏寬恆 1138 票險勝」『自由時報』（2013年1月27日）頁1
- 43 中央選舉委員會ホームページ「第8屆立法委員臺中市第2選舉區缺額補選選舉結果」（2013年1月26日）[http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-20481\\_c4133-1.php](http://web.cec.gov.tw/files/15-1000-20481_c4133-1.php)
- 44 中国国民党ホームページ「台中市立委補選結果 顏寬恆勝出 曾副主席感謝鄉親支持國民黨 新增立院生力軍」（2013年1月26日）<http://www.kmt.org.tw/page.aspx?id=32&aid=8852>
- 45 民主進歩党ホームページ「『改革的列車會繼續前進』-對台中市二選區立委補選結果的回應」（2013年1月26日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6458](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6458)
- 46 「父子抗一黨 馬猶如人間蒸發」『聯合報』（2013年1月27日）頁3。
- 47 「馬執政失敗 顏家失票主因」『自由時報』（2013年1月27日）頁4。
- 48 「鐵票沒出來 未來有苦頭吃」『自由時報』（2013年1月27日）頁4。
- 49 「民進黨：在台中 看見翻盤的希望」『中国時報』（2013年1月27日）頁2。
- 50 総統府ホームページ「總統主持中華民國102年開國紀念典禮暨元旦團拜」（2013年1月1日）<http://www.president.gov.tw/Default.aspx?tabid=131&itemid=28941&rmid=514>
- 51 「『送媽祖到釣魚台』日艦噴水阻撓」『聯合報』（2013年1月25日）聯1。
- 52 「釣魚台風雲再起 台日中首度會師」『中国時報』（2013年1月25日）聯1。
- 53 「日艦水柱強攻 毀了媽祖神龕」『中国時報』（2013年1月25日）聯3。
- 54 「日暗示漁業會談恐延期」『聯合報』（2013年1月25日）聯6。
- 55 「全家福號挺進釣島 台日艦護噴水」『自由時報』（2013年1月25日）聯2。
- 56 「我宣示主權 大陸冷處理」『中国時報』（2013年1月25日）聯3。
- 57 民主進歩党ホームページ「蘇主席將訪日開展民主繁榮和平之旅」（2013年1月28日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6460](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6460)
- 58 民主進歩党ホームページ「民主進歩黨訪日『民主和平繁榮之旅』今日啟程」（2013年2月3日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6471](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6471)
- 59 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌與日僑餐敘感謝過去支持 期許未來共同打拚重返執政」（2013年2月3日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6471](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6471)

- org.tw/news\_content.php?&sn=6472
- 60 民主進歩党ホームページ「蘇貞昌：強化民主同盟，維持區域安全與繁榮」（2013年2月4日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6473](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6473)
- 61 民主進歩党ホームページ「感謝增進台日關係，蘇主席拜訪日華懇議員」（2013年2月4日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6474](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6474)
- 62 民主進歩党ホームページ「與岸信夫等自民黨議員共進早餐，蘇主席：強化與日新生代議員交流」（2013年2月5日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6475](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6475)
- 63 民主進歩党ホームページ「蘇主席：台日關係情同手足，盼和平對話弭平紛爭」（2013年2月6日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6476](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6476)
- 64 「台日協商釣島漁權 蘇：不讓他國見縫插針」『自由時報』（2013年2月7日）頁6。
- 65 民主進歩党ホームページ「參訪江戸川市民發電所，蘇主席籲國人踴躍連署公投，實現非核家園」（2013年2月7日）[http://www.dpp.org.tw/news\\_content.php?&sn=6479](http://www.dpp.org.tw/news_content.php?&sn=6479)
- 66 「TPP 議題 美日峰會獲進展」『自由時報』（2013年2月24日）頁2、「美日聯合聲明 TPP 談判各取所需」『聯合報』（2013年2月24日）頁3、「談 TPP 不必關稅日意願大增」『中國時報』（2013年2月24日）頁3。
- 67 「華府演說緊握拳頭 安倍：找回強大日本」『聯合報』（2013年2月24日）頁1。
- 68 「安倍：不容武力改變釣魚台現狀」『聯合報』（2013年2月24日）頁3。
- 69 「新華社暗批日方要回到軍國主義？」『聯合報』（2013年2月24日）頁3。
- 70 「安倍猛講釣島 歐巴馬愜愜」『中國時報』（2013年2月24日）頁1。
- 71 「安倍：我回來了，日本亦如是」『中國時報』（2013年2月24日）頁3。
- 72 「安倍：盼有機會和習近平見面」『自由時報』（2013年2月24日）頁2。

## 大陸向輸出依存型経済の悲哀

公益財団法人交流協会専務理事 井上 孝

2月23日に台湾行政院主計總處から2012年の国民所得統計実績見込みが公表されましたが、いかにも台湾的な数字が出ておりましたので紹介してみたいと思います。

2012年台湾の実質GDP成長率は1.26%で、前年の4.07%、前々年の10.76%に較べて著しい低成長に止まりました。原因ははっきりしていません。輸出の伸びが止まり、これに伴い民間設備投資も減少したからです。

ちょっとびっくりするのは、これを需要項目別寄与度で見ていったときです。成長率1.26%に対して、民間固定資本形成の寄与度は▲0.29%ポイント、民間消費は0.80%ポイントで、国内需要計としては0.11%ポイントとなっています。他方、輸出の寄与度は0.09%ポイントに止まっていますから、国内需要と輸出を合計しても0.2%ポイントにすぎません。低成長であったとはいえ1.26%はあったわけですから、1.06%ポイント分の需要要因がなければなりません。しかし他に正の需要項目はありません。結局、負の需要項目である輸入が減少したことにより、1.26%成長を支えたのです。確かに、2012年の輸入減の成長寄与度は1.05%ポイントと計算されています。

国民所得論では輸入を「需要の漏れ」という言い方をしますから、需要の漏れが減ったことによる成長にすぎないのです。

実は、台湾経済においては、低成長のときにはいつもこのような現象が起こっています。2012年以前で2%以下の低成長になった年は、2008年の0.73%と2009年の▲1.81%の2例あります。いずれの年も輸出が0.61%ポイントと横這いあるいは▲6.11%ポイントと減少し、民間設備投資の大幅減少▲2.61%ポイント、▲2.07%ポイント

を引き起こし、2008年のように正の需要項目の大幅減少▲1.5%ポイントを負の需要項目である輸入の減少分2.23%ポイントが吸収して低いながらも成長を実現したか、あるいは、2009年のように正の需要項目の落ち込み▲9.35%ポイントがあまりに大きすぎて輸入の大幅減少分7.53%ポイントでは吸収しきれずに大幅なマイナス成長となった例です。

台湾のGDPに占める輸出需要の割合は2012年で73.66%にもなります。民間消費の60.30%を大幅に上回る最大項目です。さらに、台湾の輸出産業は、日本等からの資本財及び中間財の輸入に支えられています。すなわち、台湾経済において、輸出は、それ自体最大の需要項目であるだけでなく、設備投資を左右することにより更に需要変動幅を拡大させ、その上、輸入さえも変動させることにより、台湾経済を決定するのです。

台湾輸出の実に約4割は大陸向けです。

したがって、大陸経済の動向が、輸出を左右し、設備投資を増減させ、輸入までも変動させることにより、台湾経済を動かしているのです。

大陸経済に詳しい識者の間からは、急速にピークアウトしつつある人口動態、生産性向上の限界、4兆元投資の反動などの問題を指摘し、「中国台頭の終焉」(津上俊哉)とさえも言われ始めている現在、大陸一辺倒になっている台湾経済構造の変革は、急務であると思わざるをえません。台湾政府からも改善への動きが出ているのは高く評価すべきでしょう。

なお、申しあげるまでもありませんが、以上はすべて筆者の私見です。

## 編集後記

3月の声を聞くと、年度末であると同時に卒業、退職、転勤等別れの季節が今年もやって来たと感じます。

かくいう私も交流協会に1973年（昭和48年）に奉職してから約40年の月日が過ぎ今年の3月末で退職することになりました。

ここに交流協会における自分史的なものを述べさせていただきます。勤務当初（1973年）は経済部その後技術協力部に名称変更（現在は貿易経済部）に配属され、国際協力機構（JICA）が実施しています（研修員受入れ、専門家派遣）を主に台湾に対する技術協力事業に携わりました。ODA予算の伸びが著しい時期経済部では、年間200名を越える研修員を台湾から受入るとともに、一方年間100名を越える専門家を台湾に派遣していました。

また、1976年（昭和51年）からは、財団法人海外産業人材育成協会（元AOTS）が実施しております産業技術研修生の研修生受入事業の台湾版にも携わっていました。

しかしながら、台湾の経済成長に伴いODA対象から外されたことにより、台湾に対する技術協力関係の事業予算は2002年（平成14年）に終了することになりました。

私は、2001年（平成13年）に総務部に移り日本語能力試験（現在は国際交流基金に移管）・後援助成事業・文化人招聘・日本語専門家派遣、共同研究、雑誌「交流」の編集等文化関係の事業に携わってまいりました。台湾は日本語世代が年々減少していますが、一方高校・大学生は第二外国語として日本のアニメやポップカルチャーの影響により日本語を選択している若者が他の外国語（ドイツ語・フランス語等）に比べ非常に多いのは大変喜ばしいのですが、しかし日本についての正確な知識等に欠けているのが現状であり、今後親日派・知日派を増やすため、台湾における日本研究等の促進に当協会の側面的な協力を通じ若者に日本理解を深めてもらうことが不可欠であると思います。

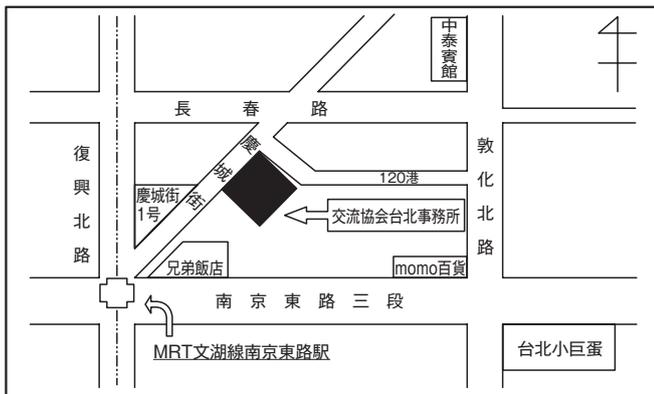
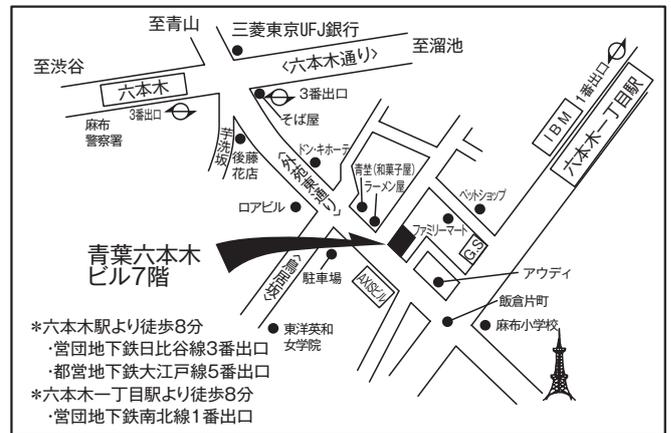
最後に、執筆者の皆様及び読者の皆様並びに関係各位には色々とお世話になりまして誠にありがとうございました。

日本と台湾との関係が益々発展することを祈念するとともに、今後とも「交流」のご愛読をよろしくお願い致します。

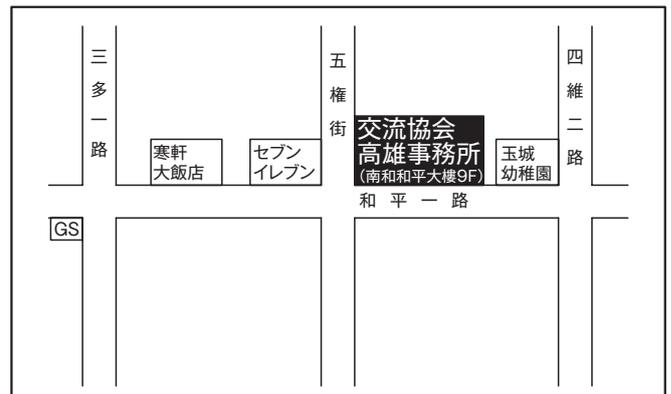
（総務部 藤本徳司）

平成25年3月26日 発行  
 編集・発行人 井上 孝  
 発行所 郵便番号 106-0032  
 東京都港区六本木3丁目16番33号  
 青葉六本木ビル7階  
 公益財団法人 交流協会 総務部  
 電話 (03) 5573-2600  
 F A X (03) 5573-2601  
 U R L <http://www.koryu.or.jp>

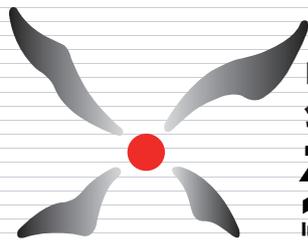
表紙デザイン：株式会社 丸井工文社  
 印刷所：株式会社 丸井工文社



台北事務所 台北市慶城街28號 通泰大樓  
 Tung Tai BLD., 28 Ching Cheng st., Taipei  
 電話 (886) 2-2713-8000  
 F A X (886) 2-2713-8787  
 URL [http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/taipei/ez3_contents.nsf/Top)



高雄事務所 高雄市苓雅区和平一路87号  
 南和和平大樓9F  
 9F, 87 Hoping 1st. Rd., Lingya Qu, kaohsiung Taiwan  
 電話 (886) 7-771-4008 (代)  
 F A X (886) 2-771-2734  
 URL [http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3\\_contents.nsf/Top](http://www.koryu.or.jp/kaohsiung/ez3_contents.nsf/Top)



日本と台湾との架け橋

公益財団法人

**交流協会**

Interchange Association, Japan (IAJ)

